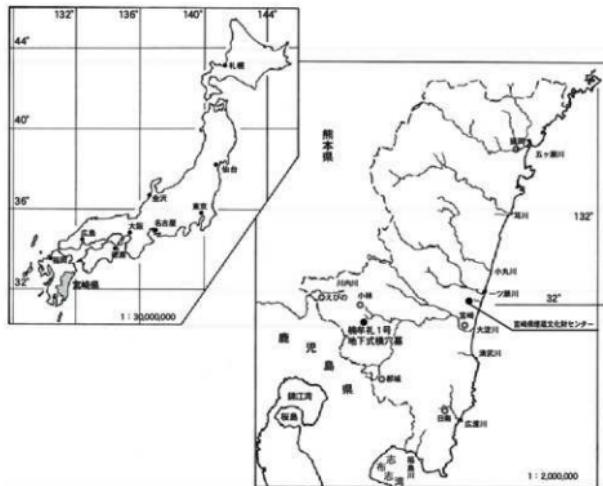


くす む れ ご う ち か し き よ こ あ な ほ
楠牟礼 1号地下式横穴墓

平成18年度交通安全整備事業一種（国道）
国道221号下堤工区歩道設置工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書





遺跡北東方向より高千穂峰方面を望む



遺跡南東方向より夷守岳方面を望む

楠牟礼 1 号地下式横穴墓全景



楠牟礼 1 号地下式横穴墓人骨等出土状况

序

宮崎県教育委員会では、県土整備部小林土木事務所が行った国道221号歩道設置工事に伴う埋蔵文化財発掘調査を実施しました。本書はその発掘調査報告書です。

本書に掲載した楠牟礼1号地下式横穴墓は、工事実施中に予定外に発見されたため、狭小の面積で非常に短期間の調査となりました。しかしながら、当該地域で多数確認されている地下式横穴墓の空白域での発見であり、岩瀬川流域の地下式横穴墓の展開、ひいては当該地域の古墳時代像を描く上で大きな成果があがりました。

本書が学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場などで活用され、文化財保護に対する理解の一助になれば幸いです。

最後に、調査にあたって御協力いただいた関係諸機関・地元の方々、並びに御指導・御助言を賜った先生方に対して、厚くお礼申し上げます。

平成20年12月

宮崎県埋蔵文化財センター
所長 福永展幸

例　言

1. 本書は平成 18 年度交通安全整備事業一種（国道）国道 221 号下堤工区歩道設置工事に伴い、宮崎県教育委員会が実施した宮崎県小林市大字堤字楠牟礼 1975-14 に所在する楠牟礼 1 号地下式横穴墓の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は宮崎県土整備部小林土木事務所の依頼を受け、宮崎県教育委員会が主体となり宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。
3. 発掘調査は平成 19 年 5 月 17 日から 5 月 28 日まで（現地調査 7 日間）行った。
4. 現地での実測等の記録は丹俊詞が発掘作業員の協力を得て作成し、写真撮影については一部、竹田享志、今塙屋義行の協力を得た。
また、発掘調査を実施するにあたり、田原建設、後楽園パッティングセンターのご協力を得た。記して感謝したい。なお、作業に従事した発掘作業員は次のとおりである。神之菌成子・鳩宿泰雄（敬称略 50 音順）。
5. 整理作業（図面作成・遺物実測及びトレイス）は丹が整理作業員の協力を得て宮崎県埋蔵文化財センターで行った。なお、作業に従事した整理作業員は次のとおりである。福田理恵子（敬称略）。
6. 人骨調査は土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアムに、空中写真撮影は九州航空株式会社に理化学的保存処理については株式会社吉田生物研究所にそれぞれ委託した。
7. 本書で使用した第 1 図「楠牟礼 1 号地下式横穴墓と周辺の遺跡」は国土地理院昭和 59 年 4 月 30 日発行の 5 万分の 1 図『霧島山』及び昭和 59 年 5 月 30 日発行の 5 万分の 1 図『野尻』を、第 2 図「楠牟礼 1 号地下式横穴墓の周辺地形図」は昭和 55 年小林市作成の 5 千分の 1 図をもとに作成した。
8. 本書で使用した土層断面及び遺物の色調等は農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帖」による。
9. 本書で使用した方位は M.N. と記したもののは磁北、G.N. と記したもののは座標北を示し、標高は海拔絶対高である。また全体図で使用した座標は世界測地系 (WGS84) 九州第 II 系に準拠している。
10. 本書の執筆は第 I 章第 1 節を飯田博之が、第 II 章第 2 節および第 V 章第 2 、第 3 節を和田理啓が、第 V 章第 1 節を丹が、第 IV 章を土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアムの松下孝幸および松下真実が行った。第 I 章第 2 節、第 II 章第 1 節および第 3 節、第 III 章については、丹の記述をもとに和田が行った。編集は和田が行った。
11. 「註」および「引用・参考文献」については、各章末尾に記した。
12. 出土遺物・その他の諸記録は、宮崎県埋蔵文化財センターで保管している。

本文 目 次

第Ⅰ章 はじめに	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の組織	1
第Ⅱ章 遺跡の位置と歴史的環境	2 ~ 4
第1節 小林市の地勢	2
第2節 立地と歴史的環境	2
第3節 古墳時代の周辺環境	3
第Ⅲ章 調査の記録	5 ~ 13
第1節 調査の概要	5
第2節 基本層序	5
第3節 楠牟礼1号地下式横穴墓の調査	7 ~ 13
1 構造	7 ~ 9
2 出土遺物	9 ~ 13
第Ⅳ章 付編 宮崎県小林市楠牟礼1号地下式横穴墓出土の古墳人骨	14 ~ 31
第Ⅴ章 まとめ	33 ~ 39
第1節 楠牟礼1号地下式横穴墓の構造	33
第2節 葬送儀礼について	33 ~ 34
第3節 西諸県地域における地下式横穴墓の展開	34 ~ 39

挿 図 目 次

第1図 楠牟礼1号地下式横穴墓と周辺の遺跡	4	第10図 副葬品実測図【鉄鎌・鍔・刀子・資金具】.....	12
第2図 楠牟礼1号地下式横穴墓位置図	5	第11図 鉄鎌編牛図	35
第3図 楠牟礼1号地下式横穴墓の周辺地形図	6	第12図 5世紀初頭の地下式横穴墓分布	36
第4図 楠牟礼1号地下式横穴墓の堅坑土層断面	7	第13図 5世紀前葉の地下式横穴墓分布	36
第5図 楠牟礼1号地下式横穴墓実測図	8	第14図 5世紀中葉の地下式横穴墓分布	36
第6図 堅坑出土遺物実測図	9	第15図 5世紀後葉の地下式横穴墓分布	37
第7図 副葬品及び人骨出土状況図	9	第16図 5世紀末葉の地下式横穴墓分布	37
第8図 副葬品実測図【鉄劍】	10	第17図 6世紀前半の地下式横穴墓分布	37
第9図 副葬品実測図【短剣】	11	第18図 6世紀後半の地下式横穴墓分布	38

表 目 次

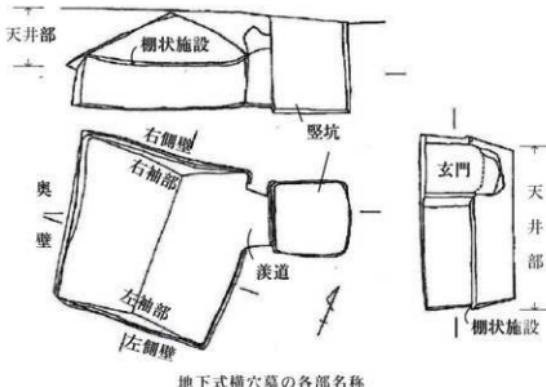
第1表 調査地点の基本土層	5
第2表 楠牟礼1号地下式横穴墓出土遺物計測表	13
第3表 楠牟礼1号地下式横穴墓データ表	39

図版目次

卷頭図版 1	卷頭 1
遺跡北東方向より高千穂峰方面を望む	
遺跡南東方向より夷守岳方面を望む	
卷頭図版 2	卷頭 2
楠牟礼 1 号地下式横穴墓全景 楠牟礼 1 号地下式横穴墓人骨等出土状況	
図版 1	43
発見時の状況 完掘状況 左側壁部分 壁坑（東から） 玄門（西から）	
図版 2	44
人骨等検出状況（南東から） 副葬品検出状況（北西から）	
図版 3	45
玄室内出土遺物① 玄室内出土遺物② 玄室内出土遺物③ 玄室内出土遺物④ 壁坑出土遺物	

凡例

1 地下式横穴墓の各部名称は下図のとおりとする。



地下式横穴墓の各部名称

- 2 剣と短剣の区分や刀剣類の各部名称については石井昌國（1996）、池淵俊一（1993）を参考にした。
3 鉄鎌の分類、各部名称については水野敏典（2007）及び和田理啓（2001）を参考にした。

【参考文献】

- 石井昌國 1996 「古代刀の変遷」『古代刀と鉄の科学』
池淵俊一 1993 「鉄製武器に関する一考察—古墳時代前半期の刀剣類を中心として—」『古代文化研究』No.1
水野敏典 2007 「古墳時代鉄鎌研究の諸問題」『古代武器研究』第8号
和田理啓 2001 「日向の地下式横穴」『九州の横穴墓と地下式横穴墓』第4回九州前方後円墳研究大会第1分冊

第Ⅰ章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

平成19年5月7日（月）、小林土木事務所が事業を実施する交通安全施設等整備事業国道221号自歩道設置の施工中に陥没が起り、開口した穴の中に入骨らしきものがあるという連絡が小林警察署にあつた。警察署の現場検証の結果、古代の墓ではないかと思われたため、小林市社会教育課が連絡を受け現地に赴き確認を行つた。

その後、市社会教育課より県文化財課に連絡が入り、同課職員が現地に急行、地下式横穴墓であることを確認した。その場で現地にいた土木事務所職員と協議、後日発掘調査について打合せを行つた。

これにより、平成19年5月8日付け第8004-564号で小林土木事務所から遺跡発見通知が提出され、小林市教育委員会を経由し県文化財課が5月14日付けで受理した。この通知を受け、県は遺跡の取扱いについて平成19年5月15日付け0850-8-1で小林土木事務所長に発掘調査を指示した。

現地は周知の埋蔵文化財包蔵地ではなかつたため、地下式横穴墓の名称を小林市と県文化財課で協議し、「楠牟礼1号地下式横穴墓」と決定した。

第2節 調査の組織

楠牟礼1号地下式横穴墓の発掘調査・整理作業及び報告書作成は下記の組織で実施した。

調査主体：宮崎県教育委員会

調査機関：宮崎県埋蔵文化財センター

平成19年度 発掘調査および整理作業

宮崎県埋蔵文化財センター

所長

清野 勉

副所長

加藤 恒郎

総務課長

宮越 尊

総務担当リーダー

高山 正信

総務担当 主査

甲斐 和也

主任主事

矢野 京子

主事

遠目塚尚子

調査第二課長

石川 悅雄

調査第三担当リーダー

福田 泰典

調査第三担当 主事

丹 俊詞

平成20年度 報告書作成

宮崎県埋蔵文化財センター

福永 展幸

長友 英詞

高山 正信

古市 篤志

矢野 京子

遠目塚尚子

石川 悅雄

福田 泰典

和田 理啓

事業調整

調査協力

宮崎県教育庁文化財課

小林市教育委員会

埋蔵文化財担当 主査

飯田 博之

第Ⅱ章 遺跡の位置と歴史的環境

第1節 小林市の地勢

楠牟礼1号地下式横穴墓が発見された小林市は、宮崎県の南西部の県境に位置し、北は熊本県多良木町、西はえびの市、東は野尻町、南は高原町や鹿児島県霧島市と境を接している。古代には日向16駅の一つである夷守駅が置かれ、日向国・肥後国・大隅国・薩摩国との4カ国を結ぶ交通の要衝であった。

北部は九州山地へ連なる山岳地帯、南部を霧島山系に囲まれた東から西に開けている内陸盆地で、この山岳地帯は新生代古第三紀の四万十層群、南部の霧島山系は新生代第四紀の霧島火山溶岩で形成されている。霧島山は北西から南東方向に合計二十三の火山が並ぶ複合火山群で、標高千メートル以上の山々が連なり幾度となく噴火を繰り返している。市内の土壤は、砂礫台地・三角州低地などの低地周辺を取り囲んでいる姶良カルデラの噴出物で形成されたシラス台地が大部分を占めるが、北部には一部、加久藤起源の火砕流堆積物もみられる（小林市教育委員会1993）。シラス台地・沖積地とともに牛の脛火山灰・アカホヤ火山灰・黒ボクなどの土壤が見られる。牛の脣火山灰は約7,300年前の御鉢起源と考えられる火山灰で、黒ボクは霧島火山の噴出物由来とした、有機物を多く含む土壤である。

第2節 立地と歴史的環境

楠牟礼1号地下式横穴墓は小林市大字堤字楠牟礼に所在する。高原町との市町境、小林市南東部に位置し、岩瀬川の支流である辻ノ堂川に面した低地を西に望む海拔約180mの舌状に張り出す丘陵先端部に立地している。遺跡が立地する丘陵は、小林市の市街地が展開する小盆地（以後、「小林盆地」と仮称する。）の東南側を区画しており、宮崎平野部へ通じる岩瀬川の本流、及びその支流の辻ノ堂川を望め、陸上においては野尻や高崎・都城方面と小林盆地との境界をなしている。このような地勢から今回の調査地を含む当該地域が陸路・水路のどちらにおいても要衝であったことは容易に想像がつく。しかしながら、弥生時代以前については目立った遺跡の分布は確認されておらず、その様相は判然としない。古墳時代以降についても、遺跡の分布密度はあまり高いといえないが、すぐ南側の高原町側では立山遺跡（第1図8）や荒迫遺跡（第1図7）で4～5世紀にかけての集落跡が確認されている（永友良典ほか1997、久木田浩子ほか1998）。特に立山遺跡では、古墳時代の住居址が30軒以上確認されており当該地域では傑出した集落である。このように幾つかの遺跡は知られるものの、点的で地域における古墳時代の生活像を描くほどの資料には恵まれていないのが現状である。それに対し、周辺地域は地下式横穴墓の分布が県内でも密であることが知られており、詳細は後述するが古墳時代の政治的位置づけについてはある程度言及が可能である。

古代においては、荒迫遺跡で確認された畠址が知られる（久木田ほか1998）が、その経営主体、継続期間など不明な点が多い。しかしながら埋没状況などからほぼ同時期と考えられる畠址が數カ所見つかっており、この時期、比較的大規模な農地開発がなされていた可能性がある。

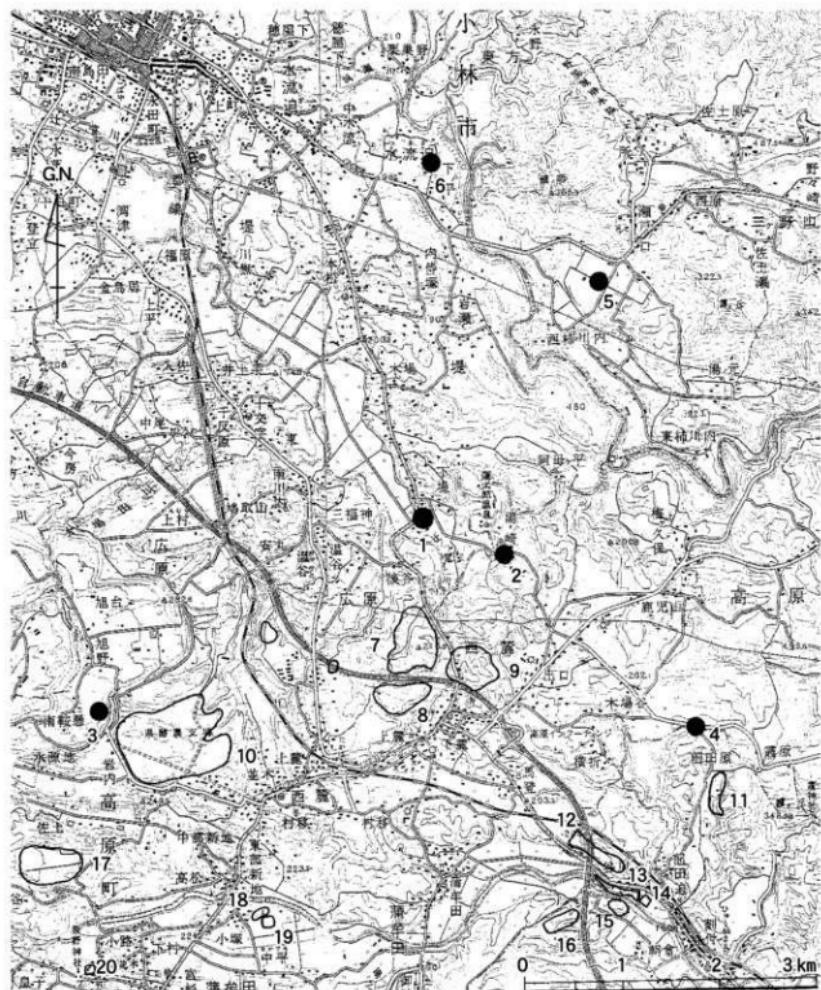
中世期には、調査地の南南西約2kmに、後に伊東四十八城に数えられた高原城（第1図9）が島津家臣の梅北掃部により築造され、伊東氏と島津氏との抗争の舞台となっている（大學康宏1996）。該地が交通の要衝であり、軍略上重要な攻略点であったことを端的に示している事例といつていいだろう。

第3節 古墳時代の周辺環境

楠牟礼1号地下式横穴墓が確認された周辺には、地下式横穴墓群が多数確認されている。最も近くで確認されているものは辻ノ堂川の対岸、東約1kmの高原町側で確認された湯ノ先地下式横穴墓（第1図2）である。平面形態や棚状施設があること、副葬品の組成などの類似点は多いが、天井や棚状施設の構造の差などから、楠牟礼1号地下式横穴墓よりはやや新しくなると考えられる。楠牟礼と同一丘陵上では、詳細は不明であるが北西約1.5kmの川無地区で内部を赤く塗った空洞が発見されたとの聞き取り調査がされており（小林市教育委員会1993）地下式横穴墓が分布していたと考えられる。また、周辺10km圏内には、北約3.5kmに下ノ平地下式横穴墓群（第1図6）、北約6km周辺に新田場地下式横穴墓群（面高哲郎・長津宗重1991）や東二原地下式横穴墓群（長友郁子1990）、北西に3kmに大森地下式横穴群（第1図5）、南西に約4kmには旭台地下式横穴墓群（第1図3）、南東に約4kmに日守地下式横穴墓群（第1図4）、東約6kmに立切地下式横穴墓群（面高ほか1991）などが存在している。以上のように小林盆地の西側、岩瀬川流域の範囲では、ほぼ2~4kmの間隔で地下式横穴墓群が造営されており、それぞれの集団の勢力範囲を示していると考えられる。これらの地下式横穴墓群は5世紀代に段階的に造営が開始されており、立切が最も古く、西及び北に行くに従い新しくなる傾向が確認できる。このような現象は、古墳時代中期初頭に宮崎平野部や都城盆地と小林・えびの盆地などの日向内陸部をつなぐ結節点をおさえることによって力を得た岩瀬川流域の勢力が、小林盆地を東から次第に囲むようにその範囲を拡大していく状況ととらえることができる。地下式横穴墓を築造する集団の出自を近しいものとすることが許されるのであれば、人吉及び大口盆地を見据えたえびの市島内周辺の造墓集団が西諸県地域の西端を、立切を中心とする岩瀬川流域の集団がその東端をおさえ、古墳時代中期の勢力圏を形成していたと考えることも可能であろう。また、6世紀にこの地域の地下式横穴墓の分布範囲が急速に縮小していく状況は、中央における地方経営の大きな転換があったことを伺わせる。

【引用・参考文献】

- 長友郁子 1990『東二原地下式横穴墓群』小林市文化財調査報告書第2集
小林市教育委員会 1993『小林市遺跡詳細分布調査報告書』小林市理藏文化財調査報告書第7集
面高哲郎・長津宗重・近藤協・谷口武範・吉本正典・戸高真知子 1991『立切地下式横穴墓群』高原町文化財調査報告書第1集
永友良典・鎌田次郎・大學康宏 1997『立山遺跡－高原町教育文化ゾーン整備事業に伴う発掘調査報告書－』高原町文化財調査報告書第2集
大學康宏 1999『日守地下式横穴墓群』高原町理藏文化財発掘調査報告書第4集
石川恒太郎 1976『高崎町仮屋尾地下式古墳調査報告』『宮崎県文化財調査報告書』第15集
石川恒太郎 1973『高原町湯ノ崎地下式古墳調査報告書』『宮崎県文化財調査報告書』第17集
宮崎県教育委員会 1975『大荻遺跡(1)』潮戸／口地区特殊農地保全整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告
石川恒太郎・日高正晴・岩永哲夫 1977『旭台地下式古墳群発掘調査』『宮崎県文化財調査報告書』第19集
岩永哲夫 1978『新田場地下式古墳発掘調査』『宮崎県文化財調査報告書』第20集
茂山謙 1980『大荻地下式横穴36号発掘調査』『宮崎県文化財調査報告書』第22集
茂山謙・面高哲郎・岩永哲夫 1980『日守地下式横穴(古墳)54-1~4号発掘調査』『宮崎県文化財調査報告書』第22集
岩永哲夫 1981『日守地下式古墳群確認調査』『宮崎県文化財調査報告書』第24集
北郷泰道 1981『下の平地下式横穴発掘調査』『宮崎県文化財調査報告書』第24集
北郷泰道・岩永哲夫・茂山謙 1984『大荻地下式横穴墓群』『宮崎県文化財調査報告書』第27集
茂山謙 1985『大荻地下式横穴37号発掘調査』『宮崎県文化財調査報告書』第28集
面高哲郎・長津宗重 1991『新田場地下式横穴墓群調査報告』『宮崎県文化財調査報告書』第34集
久木田浩子・和田理啓 1998『荒追遺跡』『宮崎フリーウェイ工業団地造成に伴う発掘調査報告書』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第11集
大學康宏 1996『高原城跡』『日向の城を読む』No.2
和田理啓 2001『日向の地下式横穴』『九州の横穴墓と地下式横穴墓』第4回九州前方後円墳研究大会第1分冊



1. 楠牟礼1号地下式横穴墓
 2. 湯ノ地下式横穴墓群
 3. 旭台地下式横穴墓群
 4. 日守地下式横穴墓群
 5. 大萩地下式横穴墓群
 6. 下ノ平地下式横穴墓群
 7. 荒追遺跡
 8. 立山遺跡
 9. 高原城跡
 10. 大鹿倉遺跡
 11. 仮屋尾遺跡
 12. 鳥井遺跡
 13. 横星敷遺跡
 14. 香積寺跡
 15. 高原城
 16. 池山口遺跡
 17. 大谷遺跡
 18. 小塚遺跡
 19. 小塚庵寺
 20. 神徳院跡

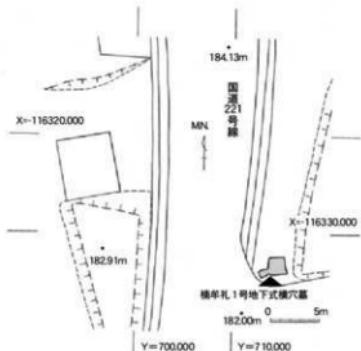
第1図 楠牟礼1号地下式横穴墓と周辺の遺跡（1:50000）

第Ⅲ章 調査の記録

第1節 調査の概要

楠牟礼1号地下式横穴墓の発掘調査は平成19年5月17日から5月28日（現地調査7日）にかけて行われた。

5月17日に現地で工事関係者と現状確認をし、翌18日から崩落した玄室内の土を除去し、玄室内部の確認を行った。玄室上部の地盤は工事により削平されており、天井は薄い部分では10cm弱しか残っておらず、さらに玄室内面の崩落が進んでいる状態であった。また、国道脇の調査であり、車両通行時の振動で天井が崩落する危険性があった。このため先に天井部分を掘削し、調査時の安全を確保することとし、まず天井部分の写真撮影と図面を作成した。併行して堅坑部分の半裁を行い土層断面図を作成した。その後、天井部分を掘削し、安全を確保した状態で玄室の調査を行った。23日に堅坑・玄室の精査を行い、出土状況の写真撮影および、副葬品や玄室の図面を作成し、人骨以外の遺物の取り上げを行った。人骨については土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアムに委託し、平成19年5月24～25日にかけて取り上げを行った。人骨取り上後、精査時に出土した遺物やその他の図面を作成し28日に発掘調査を終了した。なお、空中撮影に関しては現地調査終了後の6月6日に行った。



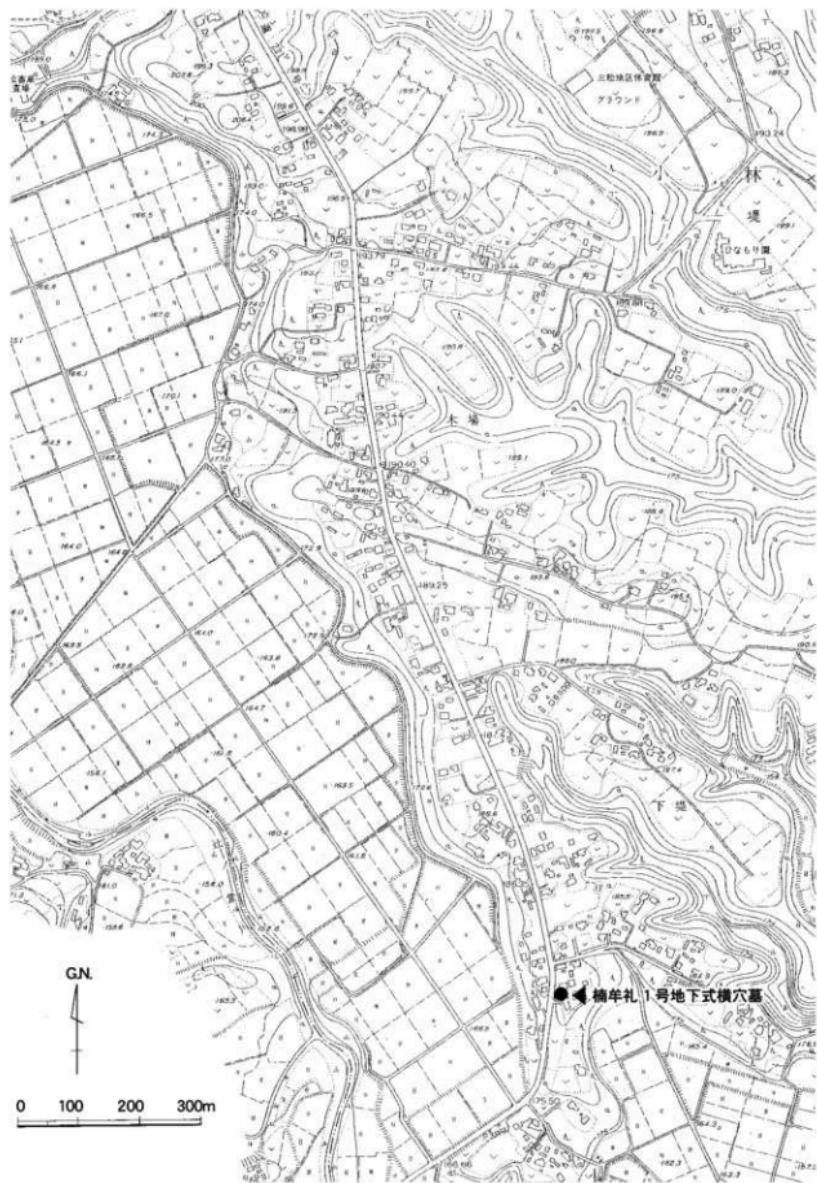
第2節 基本層序

今回の調査地の基本土層は第1表に示すとおりである。

工事中に発見されたため、調査地の地盤は大きく削平されており、遺構の検出は第Ⅲ層の下部～第Ⅳ層の上面で行っている。また、削平により失われた土層の復元を道路幅部分の露頭の観察により行った。なお、霧島を起源とする噴出物の特定に関しては宮崎県総合博物館の赤崎広志氏の御教示を得た。

第1表 調査地点の基本土層

第Ⅰ層	黒色土①	現地表面の表土。《耕作土》
第Ⅱ層	黒色土②	黒ボク土である。やや縮まりがある。
第Ⅲ層	明黄褐色土	鬼界アカホヤ火山灰層 (K-Ah)。
第Ⅳ層	黒褐色土	牛の脛ローム層 (下) 非常に固く閉まる。《玄室の天井部分》
第Ⅴ層	暗褐色土①	土質はやや硬く、黄褐色土の霧島小林軽石ブロックを含む。
第Ⅵ層	暗褐色土②	第Ⅴ層と近似しているが、土質はやや柔く、霧島小林軽石ブロックを含まない。
第Ⅶ層	黄褐色土	姶良Tn火山灰層。縮まりがなく柔い。《玄室・堅坑の床面》



第3図 楠牟礼1号地下式横穴墓の周辺地形図（1：8000）

第3節 楠牟礼1号地下式横穴墓の調査

1 構造

(1) 壓坑

壓坑は工事により大きく削平を受けていたため、第Ⅲ層（鬼界アカホヤ火山灰層）の下部～Ⅳ層上面で検出することとなった。壓坑の埋土中には黒ボク土を含む黒褐色土が存在していることから、築造時に壓坑が掘削された面は第Ⅱ層（黒色土層）中と考えられる。検出面の壓坑埋土は縮まりがなく、わずかな力を加えただけで容易に玄室内に流入してしまう状態であった。縦坑を半裁し土層観察を行った結果、検出面から約70～85cmで玄室に向かって斜めに傾斜した黄褐色の硬化面を確認した。硬化面は、土質、色調ともに第Ⅶ層を形成する始良Tn火山灰に酷似していた。そのため、当初はこの面を壓坑底面と考え土層断面図を作成し埋土を除去した。その後、色調が始良Tn火山灰の純層に比べやや暗く土質も硬めであることや、壓坑壁面の始良Tn火山灰層との不整合が生じていることがわかり、サブトレンチを設定し下層の確認を行うこととした。サブトレンチにより硬化面から約10～20cmほど下で純粹な始良Tn火山灰層を確認することができた。壓坑埋土には硬化した面がもう一箇所確認できており、埋土の堆積状況と併せて考えると少なくとも1～2回の追葬⁽¹⁾が行われたことがわかる。



第4図 楠牟礼1号地下式横穴墓の壓坑土層断面（1：30）

壓坑底面の規模は長さ約80cm、幅約80cmで、形状は正方形に近い。検出面からの壓坑の深さは93cmで底の方がやや狭くなっている。築造当時は逆錐台形を呈していたと考えられる。壓坑床面は玄室・羨道の床面から約10cm低い段差がつく。

なお、検出面から30cm下の埋土中から高坏の支脚部（第6図1）が出土している。

(2) 羨道

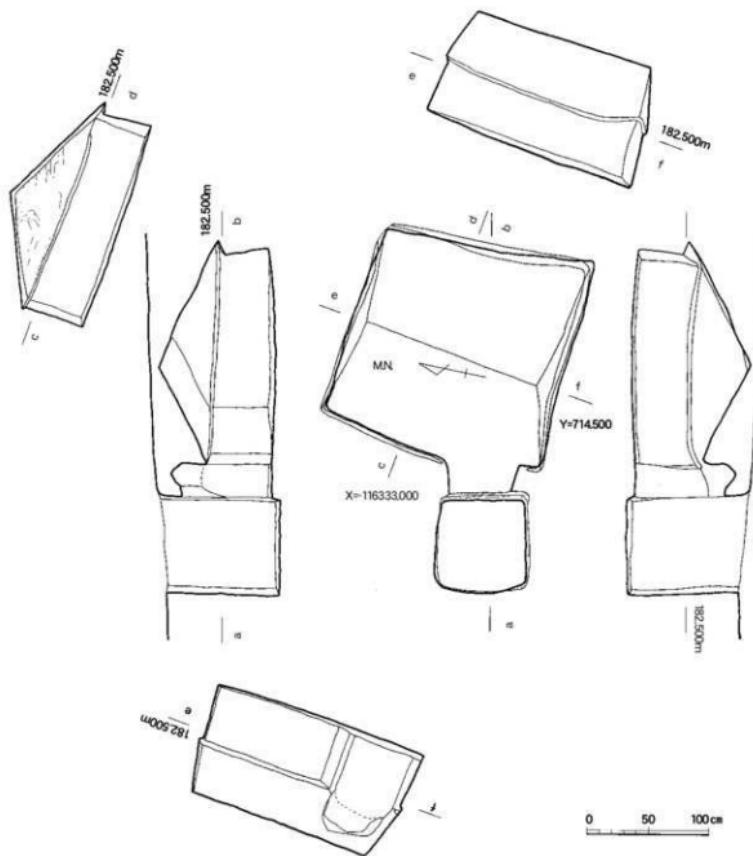
羨道は玄室に対し約20°軸を南に振り、右側壁寄りに接続する。羨道の幅は約25cm、長さが約25cm、天井部は崩落が激しいが高さ約30cmに復元できる。形状はアーチ状を呈していたと考えられる。

閉塞部については、羨門から羨道部や玄室内に壓坑埋土が多量に流入しており、早い段階に開口していたものと考えられる。土砂の流入の状況から、閉塞は羨門閉塞で、その部材は有機質のものであったと予想される。羨門部には板閉塞の痕跡などは確認できなかったが、天井部分が大きく崩落しており、閉塞に使用されていた板材の腐食に伴う土圧の増大が該部にあったものと考えたい。

(3) 玄室

玄室は、ほぼ東西方向に平行して主軸を持ち、その規模は奥行1.56～1.74m、幅1.72～1.82mで、高さ0.86～0.94mである。玄室床面積は約2.94m²で平面プランはやや歪な方形を呈す。四壁は床面から高さ約0.45mまでやや内傾して立ち上がり、その部分に幅約5～10cmの棚状施設が巡る。天井部は剥落や工事中の崩落と思われる部分が広範囲で確認されたが、寄棟の屋根形構造に復元できた。

玄室内は丁寧に工具の痕跡を消している箇所と、幅5～10cm程度の鋤先痕を残している部分がある。堅坑から羨道部を通して見える範囲は工具の痕跡もほとんどなく、棚状施設もしっかりとしており全体に



第5図 楠牟礼1号地下式横穴墓実測図 (S=1:40)

丁寧な造りであるが、その他の部分は工具痕が残り、棚状施設も簡素で粗雑な造りをしている。

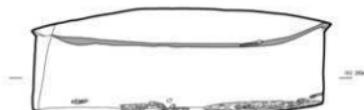
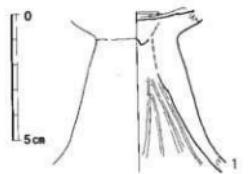
天井部分は固くしまった第IV（牛の脛ローム）層を、床面は排水性の高い始良Tn火山灰層を利用しており、耐久性、排水性を考慮し掘削されていることがわかる。

玄室内では鉄製武器類や工具類、5個体分の人骨が確認できた。人骨は頭蓋骨と下半身は比較的良好に残存していたが、胸部付近の上半身は攪乱され押し潰されているような状態で、全く残存していないかった。なお、出土遺物については次項で、人骨については第III章で詳細に触れる。

2 出土遺物

（1）豊坑出土の遺物

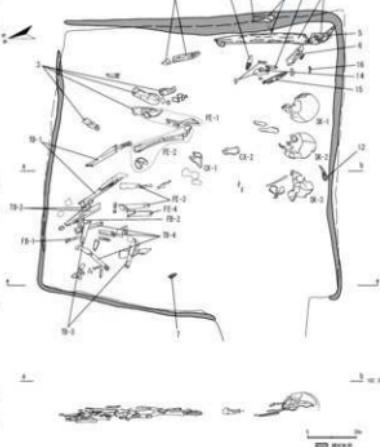
豊坑からは高坏の支脚部（第6図1）が1点出土している。現存高は約6.5cmで坏部と裾部の一部が残存している。色調は内外面ともにぶい橙であり、裾部と支脚部の境あたりに黒斑が確認できる。調整は坏部内面にミガキが施され、支脚部外面は丁寧なナデ、内面は指ナデで調整される。坏部と支脚部との接合は粘土円盤の充填でなされ、第6図 豊坑出土遺物実測図（S=1:2）充填部底面には串状の工具で刺突されたあとが残る。時期は支脚部の概形や、坏部との接合状態など5世紀代のものと考えられる（2）。後述するが玄室内的副葬品からは、初葬がおおよそTK216からTK208型式併行期と判断でき、高坏自身の年代とも重なるが、豊坑内からは出土土器と接合する土器片が全く出土しておらず、墓前や豊坑における祭祀に破損した土器を使用したとは考えにくいので、追葬時などの混入であるとした。



（2）副葬品

a. 出土状況（第7図）

副葬品は奥壁付近に集中しており、右側壁により剣（第7図2）・短剣（第7図5～6）・鐵鎌（第7図10）・刀子（第7図11、12、13）・鉈（第7図15）・貴金属具（第7図16）が、主軸線上に短剣（第7図4）が、棚状施設上に鐵鎌（第7図7・9）が出土している。また、玄室中央からやや北東に剣（第7図3）、玄門からやや北の玄室左袖部分から刀子（第7図14）が出土している。出土状況から2・4・7・9・15はほぼ原位置をとどめていると考えられるが、他の副葬品は、経年による劣化や工事の振動による天井・壁面の剥落および土砂の流入などのために移動していると考えられる。



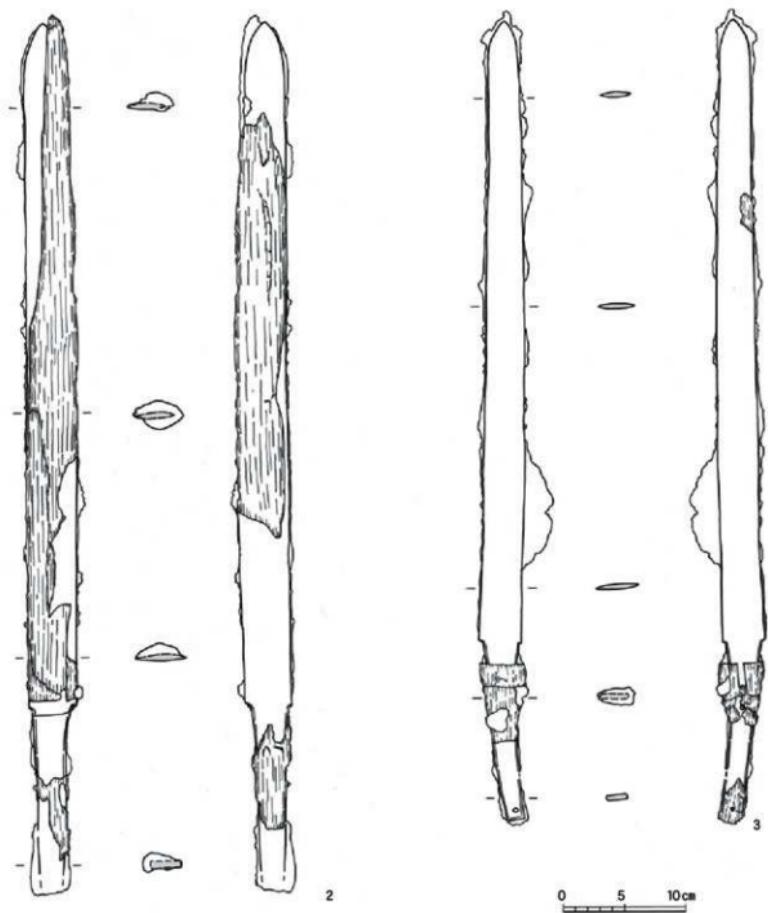
* SK, FE, FB, TB, CX は人骨

第7図 副葬品及び人骨出土状況図（S=1:30）

b. 剣 (第8図2・3)

2と3は剣である。2は奥壁に接して鋒を足元にむけた状態で出土しており、おそらく初葬時の副葬品であろう。全長71.2cm、剣身長55.8cm、茎長14cm強を測り、身幅は3.0～3.8cmで有機質の鞘や柄が良好に残存していた。柄の部分には短剣の鋒（第9図5）が銹着していた。関は浅斜角関で、茎部は錆彫れ等ではっきりしないが中細茎と考えられる。

3は大きく4つに折れた状態で玄室のやや中央よりでかたまって出土した。出土状況から追葬時に擾乱を受けたものと考えられる。全長は65.2cm、剣身長50.6cm、身幅2.4～3.4cm、茎長14.8cmで関部は



第8図 副葬品実測図【鉄剣】(S=1:4)

浅角闊である。茎部にはX線写真撮影により関部から5.2cmと茎尻から0.8cmの部分に径約0.4cmの目釘穴が確認できた。

c. 短剣（第9図4～7）

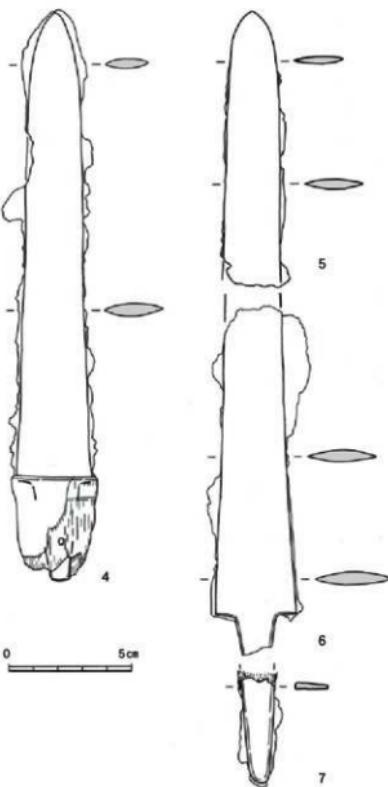
4～6は短剣である。4は剣2の北側で出土しており、出土状況からほぼ原位置をとどめていると考えられる。全長が23.2cm、剣身長約19.0cm、身幅1.9～3.0cm、茎部長約3.5cmを測り、関部形態は直角闊、茎部形態は中細茎である。柄部に鹿角装の痕跡が残っており、茎尻から1.6cmの位置には目釘穴が確認できた。

5は剣2の柄部に銛付して出土した短剣の鋒である。現存長11.1cm、幅1.9～2.3cmを測る。6は鋒部と茎の一部を欠損した短剣である。現存長14.3cm、最大幅3.3cmを測り、関部は直角闊、茎部は中細茎である。7は短剣の茎と考えられる。残存長は5.1cmを測る。目釘穴は観察できなかった。明確な接合点はないが、形態、出土状況などから5と6は同一個体であると考えられる。また、7については、出土位置がかなり離れているが、形状から5、6と同一個体と判断した。

d. 鉄鎌（第10図8～11）

8～11は鉄鎌である。8と10は棚状施設上で出土している。9と11は玄室床面で出土しているが、出土状況から棚状施設上に置かれていたものが壁の剥落に伴い落下したものと考えられる。

8～10は主頭斧箭鎌である。8は矢柄の残存状態が良好で、茎部に巻かれた樹皮が茎尻に向て反時計回りに巻かれていることが観察できる。現存長は矢柄部分も含めて21.8cmで、鎌身部の最大幅は4.2cmである。刃部の左右の端に刃部闊をもつ。9は残存長が13.4cmで鎌身部の最大幅は4.2cmを測る。鎌身部の形態は菱形に近く平面形は8とはかなり異なる印象を与える。10は残存長11.5cm、鎌身部の最大幅2.8cmを測る。8や9に比べやや小型で刃部闊はもたない。11は有頭鎌で鎌身外形は長三角形である。残存長は9.0cmで、鎌身幅1.4cm前後、頭部幅0.9cm前後を測る。鎌身部には比較的深い脇挟がはいる。

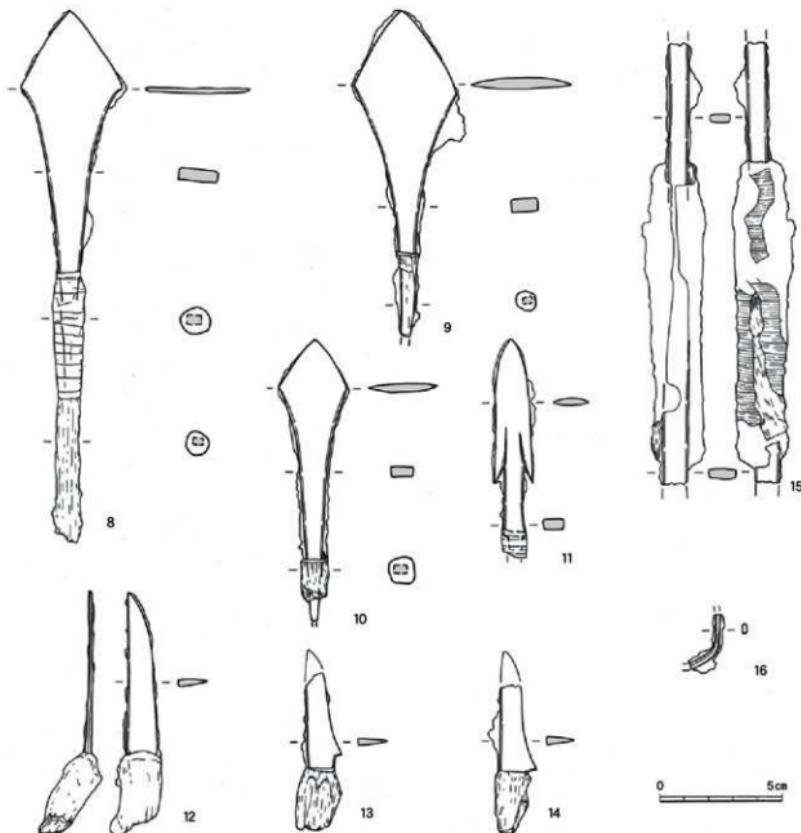


第9図 副葬品実測図【短剣】(S=1:2)

e. 刀子 (第10図 12~14)

12~14は刀子である。12はSK-2とSK-3の頭蓋骨の間で右側壁に接して、13と14は剣2と頭蓋SK-1の間から出土している。

12はほぼ完全な形であり、全長約10.0cm、刀部長6.6cm、刀身部最大幅1.2cmである。茎部分は有機質の柄が残存しており、形状等は不明瞭である。関部は、棟側に關があるのが確認できる。他遺跡の出土例から考えて刀部側にも浅い關があるものと考えられる。刃部は鋒からやや枯れたフクラを有し直線状に關部へ至る。柄部分は大きく屈折し「く」の字に変形している。13と14は鋒部を欠いた刀子である。13が残存長6.1cm、14が6.5cmである。刀身部最大幅は13が1.5cm、14が1.4cmである。刃部は13、14ともに鋒方向から大きく内湾し關部に至る。關部は刃關のみの片關である。残存部から予想される形態は、14の柄部が棟側に若干屈曲する以外は、大きさ刃部形態ともほぼ同型であるといえる。



第10図 副葬品実測図【鉄鎌・鎧・刀子・貴金属】(S=1:2)

f. 鍔（第10図15）

15は刃部を欠いた鍔と考えられる。剣2からSK-1よりに約30.0cmの位置で出土している。残存長で約18.0cmで幅0.8cmを測り、有機質の箇巻の痕跡が明瞭に認められる。また一部に繊維の痕跡も確認できた。

g. 貴金属（第10図16）

16は貴金属と考えられる。剣2とSK-1とのほぼ中間、右側壁付近で出土している。形状から全体の1/2以上を欠損していると考えられる。出土位置や他の副葬品との関係、鹿角装の一部と考えられる有機質が銹着していることから剣2または短剣6の柄に伴うものではないかと予想される。

第2表 楠牟礼1号地下式横穴墓出土遺物計測表

(単位: cm)

No.	器種	全長	最大幅	最大厚	備考
2	剣	71.2	3.6	0.6	鞘が残存
3	剣	65.2	3.4	0.4	柄の部分に木質が残存
4	短剣	23.2	3.0	0.6	柄の部分に木質と鹿角装が残存
5	短剣	11.1	2.3	0.4	短剣鋒部 6と同一個体か
6	短剣	14.3	3.3	0.7	茎部を一部欠損
7	短剣	5.1	1.5	0.3	茎部
8	鉄鐵	21.8	4.3	0.5	茎部分に樹皮が良好に残存
9	鉄鐵	13.4	4.0	0.5	茎部分に木質が残存
10	鉄鐵	11.5	2.8	0.4	茎部分に木質が残存
11	鉄鐵	9.0	1.4	0.3	茎部分に樹皮が一部残存
12	刀子	10.0	1.2	0.3	茎部分に木質が残存
13	刀子	6.1	1.5	0.3	
14	刀子	6.5	1.4	0.3	
15	鍔	18.0	0.8	1.5	樹皮が巻かれている
16	貴金属	2.2	0.3	0.3	一部に有機質(鹿角?)が付着

註

- (1) 堅抗上部がかなり削平されているので土層断面の観察は完全ではない。実際の追葬回数はさらに多い可能性がある。
- (2) 土師器の調整等については宮崎県埋蔵文化財センター石川祝雄に、年代観については同センター今塙辰義行に教示を得た。

【参考文献】

- 松林豈樹 1999『西下本庄遺跡—県立学校運動場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第15集
東真一 2000『内小野遺跡—県営緊急畠地帯総合整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書—』えびの市埋蔵文化財調査報告書第24集

第IV章 付 編

宮崎県小林市楠牟礼1号地下式横穴墓出土の古墳人骨

* 松下孝幸 ** 松下真実

【キーワード】：宮崎県、古墳人骨、地下式横穴墓、擾乱、高上顎

はじめに

宮崎県小林市大字堤宇楠牟礼1975-14に所在する楠牟礼1号地下式横穴墓は国道221号線の歩道設置工事に伴って発見された地下式横穴墓で、発掘調査は2007年(平成19年)5月におこなわれた。この地下式横穴墓が発見された際に玄室の天井の一部が崩落したが、落ちた土塊のあいだから頭蓋が3個確認されていた。

宮崎県や鹿児島県の大隅半島などには古墳時代に南九州で特異的に出現する地下式横穴墓が盛行する。筆者らは、この独特の埋葬施設に葬られた古墳人の形質的特徴を明らかにし、古代において熊襲・隼人と呼称された人々の形質的解明をおこなうために、以前から南九州地域から出土する古人骨の発掘調査とその研究をおこなってきた。総論的な見通しをたてるために必要な体数が確保できた時点で、その概要をまとめたことがある(松下、1990b)。

この研究では、山間部と平野部で形質的な差異が認められたので、山間部タイプと平野部タイプに分け、さらに平野部タイプをIとIIに細分した。山間部タイプは低・広顎、低身長で、西北九州タイプの弥生人にきわめて近く、形質的には縄文人の特徴を継続していると考えられるが、平野部タイプは、高顎、高身長を特徴とし、北部九州タイプの弥生人や畿内の古墳人に近い特徴を示していた。平野部IIタイプは、頭の高さが低く、眼窩の高径も低く、周辺地域に同じ様な特徴を示す例が今のところ存在しない。

小林市ではかつて新田場地下式横穴墓と下ノ平地下式横穴墓(松下、宮崎県史)および東二原地下式横穴墓群(松下・他、1993a)から人骨が出土している。東二原からは7基の地下式横穴墓から合計21体の人骨が検出されたが、人骨はすべて埋葬状態の姿勢を保っており、本例のように擾乱された形跡はなかった。男性頭蓋は長頭型であるが、女性は短頭型に近い中頭型で、顎面には男女ともに「低・広顎」傾向が認められた。推定身長値は男女それぞれ2体が算出できた。女性は2例とも150cm以下の低身長であるが、男性は低身長と高身長の例がそれぞれ1例ずつみられた。

本地下式横穴墓からは5体分の人骨が検出された。他の地域に比べるとまだ出土例の少ない地域だけに資料としては貴重である。人骨の保存状態は必ずしも良好なものではなかったが、人類学的観察や計測をおこなったので、その結果を報告しておきたい。

* Takayuki MATSUSHITA, ** Masami MATSUSHITA

The Doigahama Site Anthropological Museum〔土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム〕

資料

今回調査がおこなわれた楠牟礼1号地下式横穴墓の形式は平入りで、堅坑は玄室の西側にあり、玄門は玄室の西側に開口している。頭蓋は玄室の南側で3個確認された。四肢骨は玄室の北側で搅乱状態で検出され、埋葬状態を完全には保っていない。胸部や腰部にあたる部分では寛骨を一部確認することができたが、踏みしだかれていた。上肢骨は頭蓋方向へ押しやられた状態で、保存状態はきわめて悪い。頭蓋は3個とも一見、埋葬状態を保っているようにみえた。しかし、現場で詳細に観察したところ、SK-2(頭蓋)は埋葬状態を保っていると思われるが、SK-1(頭蓋)は左側に倒れており、また、SK-3(頭蓋)は破損していることから、両頭蓋は多少動かされていると思われる。玄室の大きさから玄門に近い部分にはもう1体埋葬することができるスペースが残されているが、頭蓋は見つからなかった。しかし、この場所から第三大臼歯の歯冠が検出されたことから、ここにも遺体が埋葬されていたようである。四肢骨の実測図と取り上げた四肢骨とを検証してみたところ、脛骨は玄室内で順序よく並んでいるので、おそらく原位置に近い状態を保っているものと判断した。大腿骨は同一個体と思われるものがかなり離れた場所から検出されていることがわかったので、首から下の膝関節までの骨は搅乱状態と推断した。脛骨の位置はおそらく頭蓋の位置と大きくは変わっていないものと思われるが、念のために個体番号を付けないで、骨ごとに番号を付した。頭蓋や四肢骨の検出状況と後述している所見から、この地下式横穴墓には合計5体が埋葬されていたようである。前述しているように人骨は埋葬状態を完全には保っておらず、胸・胸部を中心にかなり搅乱を受けている。これまで筆者らが調査した例では、地下式横穴墓から検出された人骨は基本的には埋葬状態を保って出土しており、このように搅乱状態の人骨はきわめて珍しい。盗掘を受けていないとすれば、先祖に対する祭祀儀式の一環として、最終祭礼行事終了後、人骨を搅乱した可能性がある。なお、副葬品としては、保存良好な鉄鏃が棚から、また剣などが人骨に伴って検出されている。

表1 資料数 (Table 1. Number of materials)

	成 人			未 成 人	合 計
	男 性	女 性	不 明		
頭 蓋	2	1	0	1	4
上腕骨	0	0	1	0	1
寛 骨	1	0	1	0	2
大 腿 骨	2	2	0	0	4
脛 骨	2	2	0	1	5
腓 骨	0	1	1	0	2

楠牟礼1号地下式横穴墓から検出された頭蓋は3体分で、その他に第三大臼歯の遊離歯冠などが1体分ある。四肢骨は搅乱されていたが、実測図を基にしながら整理復元してみたところ、5体分の四肢骨と判明した。しかし、搅乱のために頭蓋と大腿骨、上腕骨などを個体別に組み合わせることは不可能であった。なお、頭蓋は玄室の奥から順にSK-1、SK-2、SK-3、SK-4(歯)という番号を付けた。四肢骨では、上腕骨にはHU、寛骨にはCX、大腿骨にはFE、脛骨にはTB、腓骨にはFBという記号を番号の前に付けた。表1に示すとおり、本地下式横穴墓から出土した人骨は、頭蓋が3体分、第三大臼歯の歯冠が1体分、上腕骨は1体分、寛骨は2体分、大腿骨は4体分、脛骨は5体分であった。第三大臼歯には咬

耗が認められないので、未萌出であった可能性が強い。歯冠の様態から成年の可能性がある。脛骨5体分のうち1体分は後述しているように16歳程度の大きさであることから、この脛骨(TB-5)と第三大臼歯(SK-4)は同一個体の可能性が強い。従って、最小個体数は5体ということになる。成人頭蓋3体分のうち男性は2体、女性1体である。大腿骨と脛骨はそれぞれ男性が2体、女性が2体なので、成人は少なくとも男女それぞれ2体ずつの合計4体が埋葬されていたことになる。各人骨の性別・年令などは表2のとおりである。なお、年齢区分は表3のとおりである。

表2 出土人骨一覧 (Table 2. List of skeletons)

人骨番号	性別	年齢	骨名	備考
SK-1	男性	熟年	頭蓋	おそらくTB-1と同一個体
SK-2	男性	壮年	頭蓋	おそらくTB-2と同一個体
SK-3	女性	壮年	頭蓋	おそらくTB-4と同一個体
SK-4	不明	成年	歯冠	おそらくTB-5と同一個体
HU-1	不明	不明	上腕骨	
CX-1	男性	不明	寛骨	
CX-2	不明	不明	寛骨	
FE-1	男性	不明	大腿骨	
FE-2	女性	不明	大腿骨	
FE-3	男性	不明	大腿骨	
FE-4	不明	不明	大腿骨	
TB-1	男性	不明	脛骨	
TB-2	男性	不明	脛骨	
TB-3	女性	不明	脛骨	
TB-4	女性	不明	脛骨	
TB-5	不明	成年	脛骨	
FB-1	不明	不明	腓骨	
FB-2	女性	不明	腓骨	

なお、脛骨は特徴などから性判別は容易であったが、頭蓋の性別推定は保存状態が悪いこともあってやや困難であった。前述しているように脛骨と頭蓋の位置は埋葬当時の原位置を保っていると思われるので、頭蓋の性別は脛骨から推断した。

この5体の人骨は、考古学的所見より、5世紀中頃に属する古墳時代人骨である。計測方法は、Martin-Saller (1957) によったが、脛骨の横径はオリビエの方法で計測し、鼻根部については鈴木 (1963) の方法で計測した。

表3 年齢区分 (Table 3. Division of age)

年齢区分		年齢
未成人	乳児	1歳未満
	幼児	1歳～5歳 (第一大臼歯萌出直前まで)
	小児	6歳～15歳 (第一大臼歯萌出から第二大臼歯歯根完成まで)
	成年	16歳～20歳 (蝶後頭軟骨結合癒合まで)
成人	壮年	21歳～39歳 (40歳未満)
	熟年	40歳～59歳 (60歳未満)
	老年	60歳以上

注) 成年という用語については土井ヶ浜遺跡第14次発掘調査報告書(1996)を参照されたい。

所 見

各骨の計測値は文末に一括して掲げた。

I 頭蓋

SK-1 (男性、熟年)

1. 頭蓋

右側頸骨と右側側頭骨に赤色顔料が少量付着している。

(1) 脳頭蓋

頭蓋の右半分が残存していた。眉上弓はやや隆起し、前頭結節の発達は良好で、額は狭い。外後頭隆起の発達はよくない。乳様突起の観察はできない。三主縫合とも内板は癒合している。外板は矢状縫合で癒合しているが、冠状縫合とラムダ縫合では開離部分が多い。右側の外耳道が観察できたが、骨腫は認められない。

計測値は、頭蓋最大長が175mmであるが、頭蓋最大幅は計測できない。バジオン・ブレグマ高は136mmで、頭蓋長高示数は77.71となり、頭蓋は高頭に属している。頭蓋長幅示数は算出できないが、観察によれば、頭型は短頭型に傾いている。脳頭蓋は右側半分が残存していたので、正中面までの距離を2倍して推測値を求めてみると、頭蓋最大幅は〔70mm×2=140mm〕となり、頭蓋長幅示数は〔80.00〕で、短頭型を示した。

(2) 顔面頭蓋

右半分が残存していた。眉上弓の隆起はやや強い。鼻骨を欠損しているので、鼻骨の高さは不明であるが、鼻根部は狭く、あまり扁平ではない。また、前頭突起の向きは矢状方向である。

顔面の計測はほとんどできないが、右側半分がよく残っているので、右側半分を2倍して頬骨弓幅と中顎幅の推定値を求めてみたところ、前者は〔70mm×2=140mm〕、後者は〔50mm×2=100mm〕となる。また、上顎高の推定値は〔72mm〕である。従って上顎示数は〔51.43(K)〕、〔72.00(V)〕となり、高上顎傾向が認められる。眼窩の計測値は、眼窩幅が42mm(右)、眼窓高は34mm(右)で、眼窓示数は80.95(右)となり、右側は中眼窓(mesokonch)に属する。

2. 齒

上顎骨には歯が釘植していた。残存歯と歯槽の状態を歯式で示すと、次のとおりである。

8 ⑦ 6 5 4 3 2 1	/ / / / / / / 7 /	[○：歯槽開存 ／：不明]
1 2 3 4 5 6 7 8	/ / / / / / / /	

(1：中切歯、2：側切歯、3：犬歯、4：第一小白歯、5：第二小白歯、6：第一大臼歯、7：第二大臼歯、8：第三大臼歯) 以下同じ

咬耗度は Broca の 1 (咬耗がエナメル質のみ) ~ 2 度 (咬耗が部分的に象牙質まで及ぶ) である。風習的抜歯は認められない。

3. 性別・年齢

前頭結節はやや発達しているが、眉上弓の隆起が強いので、性別を男性と推定した。年齢は三主縫合とも内板は癒合し、外板にも癒合がみられることから、熟年と思われる。

SK-2 (男性、壮年)

1. 頭蓋

左右の頬骨には少量の赤色顔料が付着している。

(1) 脳頭蓋

後頭骨と左右の頭頂骨後方が欠損している。外後頭隆起の観察はできない。前頭結節の発達は良好で、前頭鱗は丸い。三主縫合は冠状縫合と矢状縫合が観察できた。両縫合とも内外両板は開離している。左側の外耳道が観察できたが、骨腫は認められない。計測はほとんどできない。頭型は観察したところ中頭型かやや長頭型に傾いていたようである。正中矢状前頭弧長が 128mm で、正中矢状前頭弦長は 112mm で、矢状前頭示数は 87.50 である。

(2) 顔面頭蓋

眉状弓の隆起は強く、眉間もやや膨隆し、鼻根部は扁平ではない。計測値は、前眼窓間幅が 21mm、両眼窓幅は 103mm で、眼窓間示数は 20.39 である。前頭突起は矢状方向を呈している。

顔面の主要な計測はできないが、左側半分を 2 倍して、顔面の幅径を算出することができた。頬骨弓幅は [72mm × 2=144mm]、中顔幅は [45mm × 2=90mm] となり、顔全体の幅は広そうである。

眼窓の形状は四角で、眼窓幅は 44mm (右)、43mm (左) で、眼窓の幅径は広い。高径は計測できないが、推定値は 33mm ぐらいで、高径は幅径の割には高くない。

鼻根部の計測値は前眼窓間幅が 21mm、鼻根横弧長は 25mm で、鼻根彎曲示数は 84.00 となり、鼻根部は扁平ではなく、鼻骨はやや隆起している。

2. 齒

上顎骨と下顎骨の左側半分が残存していた。残存歯と歯槽の状態を歯式で示すと、次のとおりである。

/ ⑦ ⑥ ⑤ ④ / / /	/ / / ④ ⑤ ⑥ ⑦ /	[○：歯槽開存 ●歯槽閉鎖 ／：不明]
/ 7 6 ⑤ 4 ③ ② ①	① ② 3 4 5 6 7 ⑧	

咬耗度は Broca の 1 (咬耗がエナメル質のみ) ~ 2 度 (咬耗が部分的に象牙質まで及ぶ) である。また、風習的抜歯は認められない。

3. 性別・年齢

前頭結節はやや発達しているが、眉上弓の隆起が強いので、性別を男性と推定した。年齢は、観察できた冠状縫合と矢状縫合の内外両板が開離していることから壮年と思われる。

SK-3 (女性、壮年)

前頭骨と頬骨、上顎体のごく一部に赤色顔料が少量付着している。

1. 頭蓋

前頭骨と額頂骨の左半分および左側側頭骨が残存していた。眉上弓の隆起は弱そうで、前頭結節の発達は良好である。縫合は、冠状縫合のみ観察できたが、内板外板とともに開離している。左側の外耳道が観察できたが、骨腫は認められない。保存状態が著しく悪く、左側の眼窩高以外は計測はできなかった。眼窩高は34mm(左)で、やや高い。

2. 齒

左側上顎骨が残存していた。残存歯と歯槽の状態を歯式で示すと、次のとおりである。

||||| / | / 2 3 4 5 ⑥ // [○：歯槽開存 ●歯槽閉鎖 ×：不明]

咬耗度はBrocaの3度(咬耗が象牙質まで及ぶ)であるが、側切歯と犬歯の咬耗が著しく強く、歯の咬合形式は鉗子状咬合だった可能性が強い。また、側切歯と犬歯は水平にすり減っているのではなく、歯冠の中央部が崖む特異な咬耗状態を示している。なお、風習的抜歯は認められない。

3. 性別・年齢

前頭結節はやや発達し、眉上弓の隆起が弱いので、性別を女性と推定した。年齢は、観察できた冠状縫合が内外両板とも開離していることから壮年と思われる。

SK-4 (性別不明・成年)

遊離歯のみである。形状を保っているのは1個のみで、他に歯冠の一部が残っているものが1個あるが、あとは歯冠の細片である。完全な歯冠は下顎の右側の第三大臼歯と思われるが、咬耗はみられない。歯冠片も第三大臼歯と思われる。これも咬耗はみられない。歯冠片の中には咬耗跡が認められるものがあるので、被葬者は幼小児ではなかろう。第三大臼歯に咬耗がみられないことから、未萌出だったと考えられる。古墳人は20歳過ぎには第三大臼歯も萌出していることが多いので、本例は20歳未満と思われ、咬合面の様態から年齢を成年と推定した。なお、保存状態が悪いので、四肢骨の中に骨端と骨体が融合していない骨や骨端線が残存している骨は見当たらないが、後述しているように脛骨5体分のうち1体は成年脛骨の可能性が強く、この第三大臼歯と同一個体であろう。

II 四肢骨

1. 上肢骨

HU-1 (上腕骨・性別不明)

左右不明の骨体が残存していた。保存状態が悪く計測はできなかった。

2. 下肢骨

寛骨と大腿骨、脛骨、腓骨が残存していた。

C X - I (寛骨・男性)

腸骨体の一部が残存しており、大坐骨切痕が観察できた。大坐骨切痕の角度は小さい。耳状面前溝の観察はできなかった。

C X - 2 (寛骨・性別不明)

腸骨体の一部が残存していた。大坐骨切痕の観察はできない。

F E - I (大腿骨・男性)

右側は骨体の遠位半が、左側は骨体の両端部分が残存していた。粗線の発達は良好である。計測はできないが、骨体は太く、横径よりも矢状径の方が大きい。骨体が太いことから男性大腿骨と推定した。

F E - 2 (大腿骨・女性)

右側の骨体である。粗線の発達はきわめて良好で、骨体両側は後方へ伸びているが、径は小さく、骨体は細い。骨体が細いことから、女性大腿骨と推定した。

F E - 3 (大腿骨・男性)

左右の骨体が残存していた。粗線の発達はあまりよくない。計測できたのは左側だけである。計測値は、骨体中央矢状径が 27mm (左)、骨体中央横径は 26mm (左) で、骨体中央断面示数は 103.85 (左) となり、骨体両側面の後方への発達は弱い。骨体中央周は 82mm であるが、骨体は FE-2 よりも大きい。骨体の径がやや大きいことから男性大腿骨と思われる。

F E - 4 (大腿骨・性別不明)

左右不明の骨体の大片が残存していたにすぎない。性別は不明である。

T B - 1 (脛骨・男性)

左右の骨体が残存していた。骨体は著しく扁平で、径も大きい。ヒラメ筋線の発達は良好である。骨体の断面形は左右ともヘリチカの II 型を呈している。

計測値は、中央最大径が 31mm (右)、32mm (左)、中央横径が 19mm (右)、20mm (左) で、中央断面示数は 61.29 (右)、62.50 (左) となり、骨体は著しく扁平である。骨体周は 82mm (右)、85mm (左)、最小周が 76mm (左) で、骨体は大きい。骨体の径が大きいことと形態から男性脛骨である。

T B - 2 (脛骨・男性)

左右の骨体が残存していた。骨体は著しく扁平で、径も大きい。ヒラメ筋線の発達は良好である。骨体の断面形は、右側はヘリチカの V 型、左側は II 型を呈している。

計測値は、中央最大径が 29mm (右)、28mm (左)、中央横径が 21mm (右) で、中央断面示数は 72.41 (右) となり、骨体には扁平性は認められない。骨体周は 80mm (右)、最小周は 70mm (右) で、骨体は大きい。骨体の径が大きいことから男性脛骨と推定した。

T B - 3 (脛骨・女性)

左右の骨体が残存していた。骨体は小さいが、ヒラメ筋線の発達は良好である。骨体の断面形は、右側はヘリチカの IV 型で、左側は II 型を呈している。

計測値は、中央最大径が 25mm (右)、24mm (左)、中央横径は 19mm (右)、18mm (左) で、中央断面示数は 76.00 (右)、75.00 (左) となり、骨体には扁平性は認められない。骨体周は 70mm (右)、69mm (左)、で、骨体は細い。骨体が細いことから、女性脛骨と思われる。

T B - 4 (脛骨・女性)

左右の骨体が残存していた。骨体はやや細く、ヒラメ筋線の発達も悪い。骨体の断面形は、右側がヘ

リチカのII型を、左側はV型を呈している。

計測値は、中央最大径が26mm(左)、中央横径は19mm(左)で、中央断面示数は73.08(左)となり、骨体には扁平性は認められない。骨体周は71mm(左)である。骨体の径が小さいことから女性脛骨と推定した。

TB-5 (脛骨・成年、性別不明)

右側骨体の一部が残存していた。外側面を欠損しているので、計測はできないが、径は小さい。骨体の一部であるので、骨体と骨端が遊離していたか、あるいは骨端線が残存していたかは不明であるが、径がかなり小さいことから、小児あるいは成年の可能性が強いので、当館所蔵の小児骨と成年骨との比較をおこなってみたところ、土井ヶ浜1904人骨(15歳)の脛骨よりもわずかに大きい程度である。従つて、年齢を16歳程度の成年と推定した。おそらくSK-4(第三大臼歯)と同一個体と思われる。性別は不明である。

FB-1 (腓骨・性別不明)

右側の骨体が残存していた。保存状態が悪く、計測はできないが、骨体はかなり扁平である。性別は不明である。

FB-2 (腓骨・女性)

左右不明の骨体が残存していた。計測はできないが、骨体は小さい。骨体の径が小さいことから女性腓骨と思われる。

考 察

計測ができた大腿骨、脛骨について、若干の考察をおこなっておきたい。

1. 大腿骨

表4は、男性大腿骨の比較表である。骨体中央周は原村上、日守、旭台よりはかなり小さい。また、灰塚、大萩よりも小さいが、その差は前者との差に比べれば小さい。なお、横谷原村、東二原よりもやや大きく、立切の平均値にもっとも近い。骨体中央断面示数は表4では最小値を示しているが、横谷原村と大差なく、骨体の柱状性は弱い方である。

表4 大腿骨計測値(男性、右、mm)(Table 4. Comparison of measurements and indices of male right femora)

標本名	東二原		大萩		灰塚		立切		日守		旭台		原村上		横谷原村		
	古墳人	古墳人	古墳人	古墳人	古墳人	古墳人	古墳人	古墳人	古墳人	古墳人	古墳人	古墳人	古墳人	古墳人	古墳人	古墳人	古墳人
立切	原村上	立切	原村上	立切	原村上	立切	原村上	立切	原村上	立切	原村上	立切	原村上	立切	原村上	立切	
FE-3	(松下)	(松下)	(松下)	(松下)	(松下)	(松下)	(松下)	(松下)	(松下)	(松下)	(松下)	(松下)	(松下)	(松下)	(松下)	(松下)	
6.	骨体中央失状径	27 (左)	6 26.83	6 27.67	1 27	15 28.00	1 29	4 28.25	2 29.50 (左)	26							
7.	骨体中央横径	26 (左)	6 23.83	6 25.33	1 25	15 24.00	1 26	4 27.00	2 26.50 (左)	25							
B.	骨体中央周	62 (左)	6 80.33	6 83.33	1 84	15 81.93	1 88	4 87.75	2 89.00 (左)	80							
6/7	骨体中央断面示数	103.85 (左)	6 112.75	6 109.40	1 108.00	15 116.85	1 111.54	4 104.88	2 111.40 (左)	104.00							
10/9	上骨体断面示数	-	5 83.83	2 73.76	-	4 82.93	1 80.65	2 80.84	1 93.10	-							

2. 脛骨

表5は、男性脛骨の比較表である。骨体周はTB-1が82mm、TB-2が80mmで、2例の平均値は81.00mmである。前者は旭台に次いで大きく、後者は旭台、東二原、原村上に次いで大きい。平均値は旭台に次いで大きい値で、骨体の大きさは地下式横穴墓出土の古墳人としてはやや大きい方である。また、最小周は表5中最小値である。中央断面示数はTB-1が61.29で、この値は表5では最小値となる。TB-2は

72.41で、旭台、東二原に次いで大きな値である。2例の平均値は66.85で、これは原村上に次いで小さい値になる。TB-1は古墳人としては珍しく骨体が扁平である。

表6は、女性脛骨の比較表である。骨体周はTB-3が70mmで、原村上の平均値に一致し、大萩・旭台に次いで大きい。最小周はTB-4が67mmで、旭台に次いで大きい。中央断面示数はTB-3が76.00となり、東二原に次いで大きく、骨体には扁平性は認められない。

表5 脛骨(男性、右、mm) (Table 5. Comparison of measurements and indices of male right tibiae)

	縦矢孔 1 可能		第二原		大 萩		立 切		旭 台		原村上		
	古墳人	古墳人	古墳人	古墳人	古墳人	古墳人	古墳人	古墳人	古墳人	古墳人	古墳人	古墳人	
	宮崎県		宮崎県		宮崎県		宮崎県		宮崎県		宮崎県		
	(松下・他)	(松下・他)	(松下・他)	(松下・他)	(松下・他)	(松下・他)	(松下・他)	(松下・他)	(松下・他)	(松下・他)	(松下)	(松下)	
	TB-1	TB-2	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	
B	中央最大陸	31	29	4	29.10	4	29.00	11	29.09	4	30.25	2	31.00
9	中央横座	19	21	6	21.00	4	20.25	11	20.27	4	22.50	2	19.50
10	骨体周	82	80	4	80.50	4	78.25	11	77.91	4	83.00	2	80.50
10b	最小周	-	70	4	71.50	3	74.00	8	70.50	2	74.00	2	71.50
9B	中央断面示数	61.29	72.41	4	73.85	4	69.94	11	69.76	4	74.95	2	63.13

表6 脛骨(女性、右、mm) (Table 6. Comparison of measurements and indices of female right tibiae)

	縦矢孔 1 可能		第二原		大 萩		立 切		旭 台		原村上		
	古墳人	古墳人	古墳人	古墳人	古墳人	古墳人	古墳人	古墳人	古墳人	古墳人	古墳人	古墳人	
	宮崎県		宮崎県		宮崎県		宮崎県		宮崎県		宮崎県		
	(松下・他)	(松下・他)	(松下・他)	(松下・他)	(松下・他)	(松下・他)	(松下・他)	(松下・他)	(松下・他)	(松下・他)	(松下)	(松下)	
	TB-3	TB-4	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	
8	中央最大陸	25	-	4	24.25	2	26.50	8	25.38	3	27.33	5	28.00
9	中央横座	19	-	4	19.00	2	18.00	8	18.00	3	19.33	5	18.40
10	骨体周	70	-	4	68.75	2	73.00	8	68.63	3	73.00	5	70.00
10b	最小周	-	67	4	63.00	1	64	4	63.25	1	69	4	61.75 (左)
9B	中央断面示数	76.00	-	4	78.49	2	64	8	70.94	3	70.72	5	73.93

3. 非計測的特徴

眼窓上孔が、SK-1、SK-2、SK-3にみられた。また、横頸骨縫合がSK-3にみられた。

要 約

宮崎県小林市大字堤字楠牟礼1号地下式横穴墓の発掘調査が2007年(平成19年)におこなわれ、玄室から人骨が出土した。人骨は搅乱を受けていたこともあり、保存状態は必ずしも良好なものではなかったが、宮崎県の古墳時代人骨研究にとって貴重な資料となるものである。人類学的観察と計測をおこない、以下の結果を得た。

1. 人骨は首から膝までの間を搅乱されており、頭蓋と脛骨以外の保存状態は悪かった。
2. 本人骨は考古学的所見より、5世紀中頃に属する古墳時代人骨である。
3. 検出された人骨は少なくとも5体分である。成人骨は4体で、男女それぞれ2体が埋葬されていた。その他に成年骨が1体検出された。
4. 脳頭蓋の計測はほとんどできなかったが、観察によって頭型を推測することができたものが2例あり、1例(男性)の頭型は短頭型で、もう1例(男性)は中頭型か、やや長頭に傾いていたと思われる。
5. 頭面頭蓋の計測もほとんどできなかった。鼻根部は扁平ではない。観察によって顔面の傾向を知る

ことができたものが1例あったが、この1例（SK-1）は高上顎傾向を示していた。

6. 大腿骨は男女とも粗線や骨体両側面の後方への発達は良好であった。脛骨は男女ともやや大きく、男性骨体は扁平である。

7. 頭蓋長幅示数を算出することができなかつたが、観察と復元値から算出した示数值によれば、男性は中頭型に近い短頭型（SK-1）と中頭型（SK-2）で、強い短頭性を示すものは存在しなかつた。また、顎面の半分以上を欠損しているために計測ができなかつたが、観察したところ男性には高上顎傾向を示すものがある。同じ小林市の東二原古墳人では、男性は長頭型を、女性は中頭型を示しており、顎面は男女ともに低・広顎であった。本例はこの東二原とは、人骨が攪乱を受けていることなどを含めて、若干ではあるがやや差異が認められるようで、今後の検討が必要であろう。

謝 辞

《擱筆するにあたり、本研究と発表の機会を与えていただいた宮崎県埋蔵文化財センターの皆様に感謝致します。》

《参考文献》

1. Mattin-Saller, 1957 : Lehrbuch der Anthropologie, Bd. I. Gustav Fischer Verlag, Stuttgart : 429-597.
2. 松下孝幸, 1981a : 日守地下式古墳出土の人骨。日守地下式古墳群発掘調査（55-1-4号）（宮崎県文化財調査報告書23）：169-178, 182-183.
3. 松下孝幸, 1981b : 宮崎県上の原地下式古墳出土の人骨。上の原地下式古墳群発掘調査（宮崎県文化財調査報告書24）：114-129.
4. 松下孝幸・他, 1982a : 宮崎県国富町本庄28号地下式古墳出土の人骨。宮崎考古。8：16-20.
5. 松下孝幸・他, 1982b : 鹿児島県諫訪野地下式土壙3号出土の人骨。諫訪野地下式土壙3号（大口市埋蔵文化財調査報告書2）：11-15.
6. 松下孝幸・他, 1983a : 鹿児島県成川遺跡出土の古墳時代人骨。成川遺跡（鹿児島県埋蔵文化財調査報告書24）：236-261.
7. 松下孝幸・他, 1983b : 宮崎県高原町旭台地下式横穴出土の古墳時代人骨。宮崎県文化財調査報告書、26：78-107.
8. 松下孝幸・他, 1983c : 宮崎県都城市菓子野地下式横穴出土の古墳時代人骨。都城・中之城跡、菓子野地下式横穴（都城市文化財調査報告書3）：105-145.
9. 松下孝幸・他, 1983d : 山口県豊浦郡豊北町土井ヶ浜遺跡出土の人骨。土井ヶ浜遺跡第7次発掘調査概報（豊北町埋蔵文化財調査報告2）：19-30.
10. 松下孝幸, 1984a : 宮崎県野尻町大蔵地下式横穴出土の古墳時代人骨。宮崎県文化財調査報告書、第27集：53-111.
11. 松下孝幸, 1984b : 宮崎市鰐江横穴出土の古墳時代人骨。宮崎考古。第9号：34-48.
12. 松下孝幸, 1984c : 川内市横岡古墳2号出土の古墳時代人骨。外川江遺跡・横岡古墳高城川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（30））：142-146.
13. 松下孝幸, 1984d : 鹿児島県大隅半島の古墳時代人骨。鹿児島考古。第18号：171-181.
14. 松下孝幸, 1984e : 鹿児島県大口市諫訪野地下式土壙5号出土の古墳時代人骨。諫訪野地下式土壙5号（鹿児島県大口市埋蔵文化財発掘調査報告書3）：15-28.
15. 松下孝幸・他, 1986a : 宮崎県国富町市の瀬地下式横穴墓群出土の古墳時代人骨。国富町文化財資料。第4集：145-185.
16. 松下孝幸, 1986b : 鹿児島県串良町岡崎古墳群1号地下式横穴出土の古墳時代人骨。岡崎4号墳・1号地下式横穴（串良町埋蔵文化財発掘調査報告書（1）付篇：1-16.

17. 松下孝幸, 1987: 鹿児島県高山町塚崎古墳群出土の古墳時代人骨。鹿児島考古。第21集: 57-70.
18. 松下孝幸, 1988: 宮崎県高崎町出土の古墳時代人骨。高崎町文化財調査報告書、第1集: 57-158.
19. 松下孝幸, 1989a: 宮崎県高崎町の古墳時代人骨。宮崎考古・石川恒太郎先生米寿記念特集号上巻: 90-117.
20. 松下孝幸・他, 1989b: 宮崎市柿木原地下式横穴墓出土の古墳時代人骨。柿木原地下式横穴墓56-1号・江田原第1遺跡(宮崎市文化財調査報告書): 13-30.
21. 松下孝幸, 1990a: 鹿児島県宮の上地下式横穴墓出土の古墳時代人骨。宮崎考古24: 49-67.
22. 松下孝幸, 1990b: 南九州地域における古墳時代人骨の人類学的研究。長崎医学雑誌、65(4): 781-804.
23. 松下孝幸・他, 1991: 宮崎県西諸県郡高原町立切地下式横穴墓出土の古墳時代人骨。立切地下式横穴墓群(入木地区団体営ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書)高原町文化財調査報告書第1集付論: 1-100.
24. 松下孝幸・他, 1993a: 宮崎県小林市東二原地下式横穴墓出土の古墳時代人骨。東二原地下式横穴群・下の平地下式横穴群(小林市文化財調査報告書第6集): 1-96.
25. 松下孝幸, 1993b: 宮崎県の古墳時代人骨。宮崎県史、資料編 考古2: 975-986.
26. 松下孝幸, 1994: 地下式横穴基の人骨。考古学ジャーナル380(1994, 10月号): 26-29.
27. 松下孝幸, 2006: 菓子野地下式横穴墓出土の古墳人骨。都城市史 資料編 考古: 590-608.
28. 松下孝幸, 2006b: 宮崎県高崎町塚原古墳群出土の人骨。土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム研究紀要第1号: 9-20.
29. 松下孝幸, 宮崎県高崎町横谷原村地下式横穴墓群出土の古墳人骨。(投稿中)
30. 松下孝幸, 西都市酒元ノ上横穴群6-1号墓出土の古墳人骨。(投稿中)
31. 内藤芳鶴, 1973: 灰塚地下式横穴人骨。灰塚遺跡(九州綱貫自動車道埋蔵文化財調査報告(2)): 72-77.
32. 内藤芳鶴, 1974: 人骨とその理葬方法。大森遺跡(1)(瀬戸ノロ地区特殊農地保全整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告): 55-62.
33. 小片丘彦・他, 1986: 宮崎県菫子野地下式横穴出土の人骨。都城市文化財調査報告書、第4集: 47-66.
34. 小片丘彦・他, 1996: 16号支線道路横穴墓群出土の人骨について。西都原地区遺跡(西都市埋蔵文化財発掘調査報告書第22集): 128-142.
35. 佐伯和信・他, 1991: 宮崎県えびの市広畠遺跡出土の古墳時代人骨。広畠遺跡(えびの市文化財調査報告書第7集): 1-66.
36. 鈴木 茂, 1963: 日本人の骨。岩波書店、東京。

表7 頭顎底 (mm) (Cervical)

	標準孔	標準孔	標準孔	標準孔
	SK-1	SK-2	SK-1	SK-2
	男性	女性	男性	女性
1. 頭蓋骨大顎	175	-	40. 顎長	-
8. 頭蓋骨大顎	(140)	-	41. 仰顎長	74(名)
12. パシオン・ブレグマ高	136	-	42. 下顎長	-
B/I	頭蓋骨矢状示数	(80.00)	43. 上顎長	-
17/1	頭蓋骨高示数	77.71	45. 緒骨弓幅	(140) (144)
17/8	頭蓋骨高示数	-	46. 中顎幅	(100) (90)
1+8+17/3	頭蓋骨モルス	-	47. 顎高	-
5. 頭蓋骨長	99	-	48. 上顎高	(72)
9. 頭小頭の幅	-	106	頭蓋骨数 (K)	-
10. 腹大前頭幅	-	122	上顎骨数 (K) (51.43)	-
11. 高耳輪	-	-	頭蓋骨数 (V)	-
12. 腹大後頭幅	-	-	上顎骨数 (V) (72.00)	-
7. 大後頭孔長	34	-	前額頭幅	-
16. 大後頭孔長	29	-	50. 顎頭幅	21
16/7 大後頭示数	85.29	-	51. 顎頭幅 (右)	44
23. 頭蓋骨平均周	-	-	52. 顎頭幅 (左)	43
24. 横径長	-	-	53. 頭周 (右)	-
25. 正中矢状径長	-	-	54. 頭周 (左)	-
26. 正中矢状頭頸直徑	-	128	55. (1) 頭周	-
27. 正中矢状頭頸直徑	128	-	56. 鼻骨長	-
28. 正中矢状頭頸直徑	(112)	-	57. 鼻骨長小縮	9
29. 正中矢状頭頸直徑	108	112	58. 鼻骨大顎	-
30. 正中矢状頭頸直徑	112	-	59. 上顎骨長	-
31. 正中矢状頭頸直徑	94	-	60. 上顎骨增長	-
29/26 矢状頭頸示数	-	87.50	61. 上顎骨増幅	-
30/27 矢状頭頸示数	87.50	-	62. 口蓋脣	-
31/28 矢状頭頸示数	(B3.93)	-	63. 口蓋脣	-

表8 頭顎底 (mm, 度) (Facial skeleton)

	標準孔	標準孔	標準孔	標準孔
	SK-1	SK-2	SK-3	性別
40. 顎長	-	-	-	-
41. 仰顎長	74(名)	72	-	-
42. 下顎長	-	-	-	-
43. 上顎長	-	114	-	-
45. 緒骨弓幅	(140)	(144)	-	-
46. 中顎幅	(100)	(90)	-	-
47. 顎高	-	-	-	-
48. 上顎高	(72)	-	-	-
49. 頭蓋骨数 (K)	-	-	-	-
50. 上顎骨数 (K) (51.43)	-	-	-	-
51. 顎頭幅	-	-	-	-
52. 顎頭幅 (右)	80.95	-	-	-
53. 顎頭幅 (左)	-	34	-	-
54. 鼻骨長	-	-	-	-
55. 鼻骨長	-	-	-	-
56. 鼻骨長	-	-	-	-
57. 鼻骨長小縮	-	9	-	-
58. 鼻骨大顎	-	-	-	-
59. 上顎骨長	-	-	-	-
60. 上顎骨増長	-	-	-	-
61. 上顎骨増幅	-	-	-	-
62. 口蓋脣	-	-	-	-
63. 口蓋脣	-	-	-	-
64. 口蓋脣	-	-	-	-
65. 上顎骨増幅示数	-	-	-	-
66. 口蓋脣示数	-	-	-	-
67. 口蓋脣示数	-	-	-	-
68. 鼻骨長示数	-	-	-	-
69. 鼻骨長示数	-	-	-	-
70. 鼻骨長示数	-	-	-	-
71. 頭蓋骨示数	-	-	-	-
72. 頭蓋骨示数	-	-	-	-
73. 鋸利角	-	-	-	-
74. 齒槽側面角	-	-	-	-

表9 鼻根孔 (mm, 度) (Nasal root)

	標準孔	性別
	SK-1	SK-2
50. 前頭葉開闊	-	21
50 A 鼻根株直徑	-	25
50/50A 鼻根株示数	-	84.00
57. 鼻骨長小縮	-	9
44. 同側鼻幅	-	103
50/44 鼻端開闊示数	-	20.39
a. 前頭突起上幅 (右)	11	-
b. 前頭突起上幅 (左)	12	-
c. G-N 短距距離	-	-
d. 鼻根角	-	-
e. G-R 間距	-	-
f / e 鼻根短距示数	-	-
77. 鼻根短距	-	-
Fa fmo 間距	-	-
Fh 鼻根	-	-
Eh / Fa 鼻端扁平示数	-	-

表10 大腿骨 (mm) (Femur)

	標準孔	性別
	FE-3	性別
1. 髋大頭 (右)	-	-
2. 自然位全長 (右)	-	-
3. 髋大頭子長 (右)	-	-
4. 自然位全子 (右)	-	-
5. 骨体中央狭 (右)	-	27
6. 骨体中央突 (右)	-	26
7. 骨体中央橫 (右)	-	82
8. 骨体中央圓 (右)	-	-
9. 骨体中央橫 (右)	-	-
10. 骨体上矢状徑 (右)	-	-
11. 骨體上矢狀徑 (右)	-	-
12. 骨体中央曲度 (右)	-	-
13. 骨体中央曲度 (右)	-	-
14. 骨体中央曲度 (右)	-	-
15. 骨体中央曲度 (右)	-	-
16. Precondylar tubercle	-	-
17. Supra-orbital foramen (orbitofrontal foramen) (眼窓上孔)	+	*
18. Accessory infratemporal foramen (副頭頸下孔)	+	+
19. Zygomatic foramen (頬骨孔)	-	-
20. Epitrochlear osseous (肘突頭骨)	-	-
21. Metacarpia (腕骨)	-	-
22. Ossicle at the lambda (lambda小骨)	-	-
23. Parietal notch bone (頭頂骨切痕骨)	-	-
24. Transverse zygomatic suture (>5mm) (横顎弓骨縫)	-	+
25. Asterion osseus (頭頂骨後部骨)	-	-
26. Occipitomastoid osseous (頭頂骨-枕骨骨)	-	-
27. Frontotemporal articulation	-	-
28. Biasterionic suture (>10mm)	-	-
29. Mylohyoid bridging (麥舌骨連絡構造)	-	-
30. Accessory mental foramen (副口牙孔)	-	-
31. Mandibular torus (下顎角)	-	-
32. Sutural pillar (上脣骨)	-	-

表11 舌骨 (mm) (Tibia)

	標準孔	標準孔	標準孔	標準孔
	TB-1	TB-2	TB-3	TB-4
	男性	女性	男性	女性
1. 舌骨全長 (右)	-	-	-	-
1a. 舌骨粗大顎 (右)	-	-	-	-
1b. 舌骨 (右)	-	-	-	-
2. 雜項距離 (右)	-	-	-	-
3. 體大上端幅 (右)	-	-	-	-
3a. 上内關節面幅 (右)	-	-	-	-
3b. 上外關節面幅 (右)	-	-	-	-
4. 上外關節面深 (右)	-	-	-	-
4b. 上外關節面深 (右)	-	-	-	-
6. 舌骨大下端幅 (右)	-	-	-	-
7. 下端矢狀徑 (右)	-	-	-	-
8. 中央粗大顎 (右)	31	29	26	-
8a. 舌骨粗大顎 (右)	32	28	24	26
8b. 舌骨粗大顎 (右)	33	35	29	28
9. 中央橫徑 (右)	19	21	19	-
9a. 中央橫徑 (右)	20	-	18	19
9b. 中央橫徑 (右)	22	-	21	20
10. 骨体高 (右)	85	80	70	-
10a. 骨体高 (右)	85	-	69	71
10b. 骨体高 (右)	90	-	78	78
10 b / I 長厚示数 (右)	93	84	-	-
10 b. 舌骨 (右)	-	70	-	67
9 b. 中央齒面高度 (右)	-	76	-	-
9a. 中央齒面高度 (右)	61.29	72.41	76.00	-
9a-a. 采舌孔齒面高度示数 (右)	62.50	-	75.00	73.08
9a-a. 采舌孔齒面高度示数 (左)	64.71	-	72.41	71.43
10 b / I 長厚示数 (右)	61.11	62.50	-	-
10 b / I 長厚示数 (左)	-	-	-	-

表12 形態小変異 (Non-metric crania variants)

	標準孔	標準孔	標準孔
	SK-1	SK-2	SK-3
	男性	男性	女性
1. Medial palatine canal (内側鼻腔)	-	/	/
2. Pterygo-pterygoid foramen (蝶翼孔)	-	/	/
3. Hypoglossal canal bridging (舌下神經二分)	-	/	/
4. Cilindroid bridging (球狀突結構)	-	/	/
5. Condylar canal absent (頭鈍頭缺)	-	/	/
6. Tympanic dehiscence (Foramen of Heschl (>1 mm))	-	/	/
7. Jugular foramen bridging	-	/	/
8. Precondylar tubercle	-	/	/
9. Supra-orbital foramen (orbitofrontal foramen) (眼窓上孔)	+	/	*
10. Accessory infratemporal foramen (副頭頸下孔)	-	/	/
11. Zygomatic foramen (頬骨孔)	-	/	-
12. Aural exostosis	-	/	/
13. Metacarpia (腕骨)	-	-	/
14. Os incae (イカ骨)	-	/	/
15. Ossicle at the lambda (lambda小骨)	-	/	/
16. Parietal notch bone (頭頂骨切痕骨)	-	/	-
17. Transverse zygomatic suture (>5mm) (横顎弓骨縫)	-	/	+
18. Asterion osseus (頭頂骨後部骨)	-	/	/
19. Occipitomastoid osseous (頭頂骨-枕骨骨)	-	/	/
20. Epitrochlear osseous	-	/	-
21. Frontotemporal articulation	-	/	-
22. Biasterionic suture (>10mm)	-	/	/
23. Mylohyoid bridging (麥舌骨連絡構造)	-	/	/
24. Accessory mental foramen (下脣孔)	-	/	/
25. Mandibular torus (下顎角)	-	/	-
26. 齒串上孔 (上脣孔)	-	/	/



図1 遺跡の位置 (1/25000) (Fig 1 Location of the Kusumure No. 1 tunnel tumulus with underground chamber, Kobayashi City, Miyazaki Prefecture)



頭蓋上面 (Superior view of the Skull)



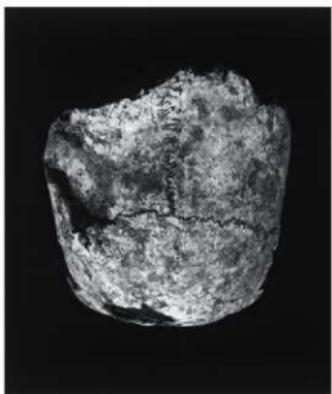
頭蓋正面 (Frontal view of the Skull)



頭蓋側面 (Lateral view of the Skull)

楠牟礼 SK-1 (男性・熟年)

(The Kusumure SK-1, mature male)



頭蓋上面 (Superior view of the Skull)



頭蓋正面 (Frontal view of the Skull)



頭蓋側面 (Lateral view of the Skull)

楠牟礼 SK-2 (男性・壮年)

(The Kusumure SK-2, young adult male)



頭蓋側面 (Lateral view of the Skull)

楠牟礼 SK-3 (女性・壮年)

(The Kusumure SK-3, young adult female)



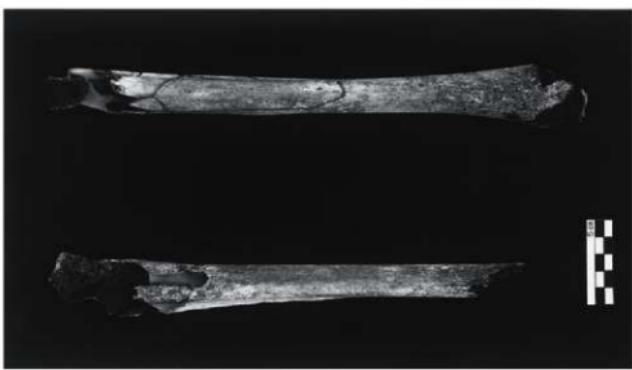
楠牟礼 FE-2 (右侧大腿骨・女性)

(The Kusumure FE-2, female right femur)

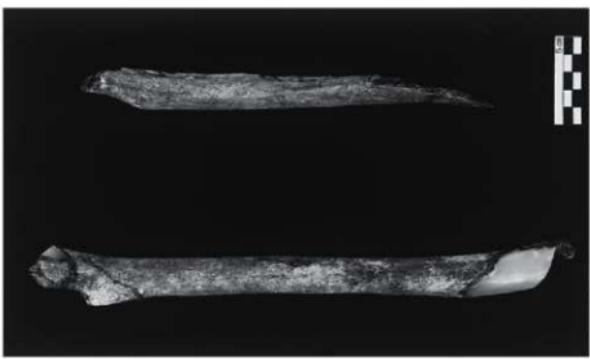


楠牟礼 FE-3 (右侧大腿骨・男性)

(The Kusumure FE-3, male femora)



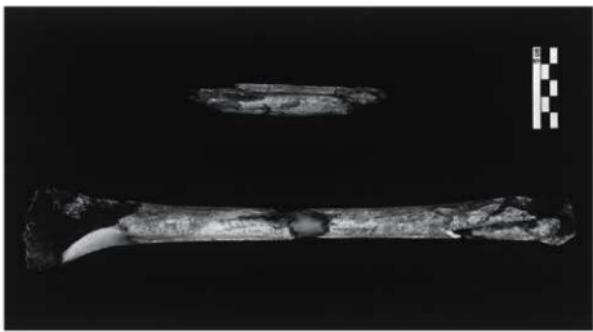
楠牟礼 TB-1 (胫骨・男性)
(The Kusumare TB-1, male tibiae)



楠牟礼 TB-2 (胫骨・男性)
(The Kusumare TB-2, male tibiae)



桶余礼 TB-3 (脛骨・女性)
(The Kusumare TB-3, female tibiae)



桶余礼 TB-4 (脛骨・女性)
(The Kusumare TB-4, female tibiae)

第V章 まとめ

第1節 楠牟礼1号地下式横穴墓の構造

楠牟礼1号地下式横穴墓の周辺には多くの地下式横穴墓群が存在しているが、同一尾根上では確認された確実な例はほかに一基もない(1)。最も近接したものでは、辻ノ堂川を挟んだ対岸に湯ノ崎地下式横穴墓が1基が確認されている。湯ノ先地下式横穴墓は楠牟礼1号地下式横穴墓と平面形態や副葬品の組成などの共通点が指摘できるが、天井構造が屋根型を成さないこと、棚状施設が四周にないことなどから、楠牟礼1号地下式横穴墓よりやや後出すると考えられる。

また、前述したように玄室内には丁寧な造りの部分と粗雑な造りの部分とがあるが、丁寧な造りの部分は堅坑から羨道部を通して見える範囲に限られているようである。羨道や玄室内は狭く中で作業できる人間は限られていたと考えられるので、地下式横穴墓を造る際に造墓の監督者が最終的に点検できた範囲のみ丁寧に造られたと考えたい。また、天井部分を固く締った牛の脛ローム層、床面を排水性の高い姶良Tn火山灰層で整形していることなどから、地下式横穴墓を造営する集団に高い設計技術が存在していた可能性を指摘しておく。

地下式横穴墓は単体ではなく、群をなす例が多いことが現在までの調査例から判明している。楠牟礼1号地下式横穴墓の周囲にも他に地下式横穴墓が存在し、群を構成していた可能性は高い。楠牟礼1号地下式横穴墓は、尾根の先端の傾斜がはじまる部分に立地しており、今回の工事区间で他に地下式横穴墓が確認されていないことから、群を構成していたとすれば、その先端を調査したと考えられる。おそらく群の本体は丘陵の平坦面に位置するのだろう。

地下式横穴墓は現状で地上に標識があることが少なく、耕運機などの使用時に、その重みに耐えられず、玄室の天井が陥没し発見されることが多い。しかし、この地域では、今回の調査事例以前の確実な発見例は存在しなかった。おそらく、今回の調査で確認できたように楠牟礼の地下式横穴墓は、現地表面から約1m以上地下に玄室空間を構築、天井部分に非常に固くしまっている牛の脛ローム層（基本層序第IV層）を使用しており、地上からの負荷に非常に強いのではないかと考えられる。今まで宮崎県下では70群700基以上の地下式横穴墓が調査されている（九州前方後円墳研究会2001）が、今回の調査は未発見の地下式横穴墓がまだ多数存在していることを推測させるに充分であろう。

第2節 葬送儀礼について

玄室内の人骨は、第IV章の報告によれば頭蓋と脛骨は「おそらく原位置に近い状態を保っている」と判断されているが、遺体が玄室主軸に直行する形に埋葬されていたとするならば、頭蓋と脛骨の位置のずれは無視できない大きさである。逆に、松下氏の見解通り頭蓋と脛骨に大きな移動が伴わないとすれば、主軸に対して18°～22°ほど東に頭を振ることとなり、非常に特異な埋葬位をとることとなる。前者であるならば、副葬品の位置から頭蓋の位置が大きく動いているとは考えにくく、下半身（特に下肢骨）が左袖部に集められることになる。そうであれば、頭蓋の残っていない1体の成人と1体の未成人の遺体がある側にわざわざ寄せたことになり、その時点で残りの2体の埋葬が行われていたかどうかにかかわらず、非常に不自然な状態といわざるを得ない。後者であるならば、頭蓋の残っていない成年の遺体をおくスペースがかなり制限されることとなる。2体分の脛骨が絡まるように出土していること

からは、後者の状態の方がまだイメージしやすいが、類例を見いだすことのできない埋葬状態である(2)。また、「首から下の膝関節までの骨」が搅乱状態であり、特に胸部や腰部にあたる部分が「踏みしだかれていた」とする所見は、何らかの儀礼的行為により遺体の損壊が行われていたことを強く示唆する。

古墳時代における儀礼的行為に伴う遺体損壊の事例としては、やや時代が下るが、大分県上ノ原48号横穴墓の例(村上久和1992)が想起される。ただし遺体の状態からは、本例の方に遙かに強い損壊の意志を感じる。通常、上ノ原横穴墓の例は、死の確認と再生阻止の儀礼としてとらえられるが、同様の思想上で本例を考えるならば、楠牟礼の造営者は非常に強い死者再生への恐れをもっていたと理解できるだろう。その場合、日向内陸の地下式横穴墓における埋葬例では、埋葬後に遺体を損壊することのみならず集骨する例すら知られておらず、楠牟礼の例のみがこのような行為を行った背景を探ることが課題となる(3)。今後の類例の増加を待ちたい。

第3節 西諸県地域における地下式横穴墓の展開

1 はじめに

西諸県地域を含む日向内陸部の地下式横穴墓については、以前は6世紀を大きく廻ることがないとの考えが主流であったが、北郷泰道により5世紀中葉にまで遡りうることが指摘(北郷1986)されて以来、個々の遺構の年代的位置づけに苦慮する結果となっていた。このような状態下でさえ、安易に遺構の整形の精粗にのみ根拠を求め年代を比定する傾向が強く、最優先されるべき個々の副葬品研究の深化は、その出土状態の良好さにみあう進展があったとはいひ難い(4)。本来、5世紀代の有力な年代的根拠になりうる蛇行劍に「最大の特徴は南九州で発見された一五本の蛇行劍のうち一本は六世紀代の地下式横穴墓に集中する」と本末転倒な評価を下している(5)ことなどは、そのいい例であろう。

このような状況を打破するためには、地下式横穴墓の副葬遺物編年の整備が急務であった。和田理啓による鐵鎌の編年(和田2001, 2002)は、古墳時代中期に限っていることや主頭鎌以外の鎌に対して細かな観察が欠けている点、長頭鎌の単純副葬期を設定しているなど不充分な面が多い(橋本達也2003, 北郷2006)が、地下式横穴墓にある一定の年代的根拠を与えたことについては評価できるだろう。

また、地下式横穴墓の消長や展開については、日向あるいは南九州全域を対象にしたもの(東憲章2001, 藤井大祐2007, 北郷2006, 和田2001)が主で、地域を小さく限ったミクロな視点での検討はあまり行われていない。

本稿では、和田の編年をもとに、えびの盆地周辺と岩瀬川流域の西諸県地域における地下式横穴墓の経年的な展開を追い、その背景を探ることで、楠牟礼1号地下式横穴墓の位置づけを検討したい。

2 鉄鎌による編年

和田は鉄鎌より地下式横穴墓をI期からVI期までに編年している(和田2001)。I期からVI期までの各期は、およそ以下の時期である。(第11図)

I期・・・4世紀末葉から5世紀初頭

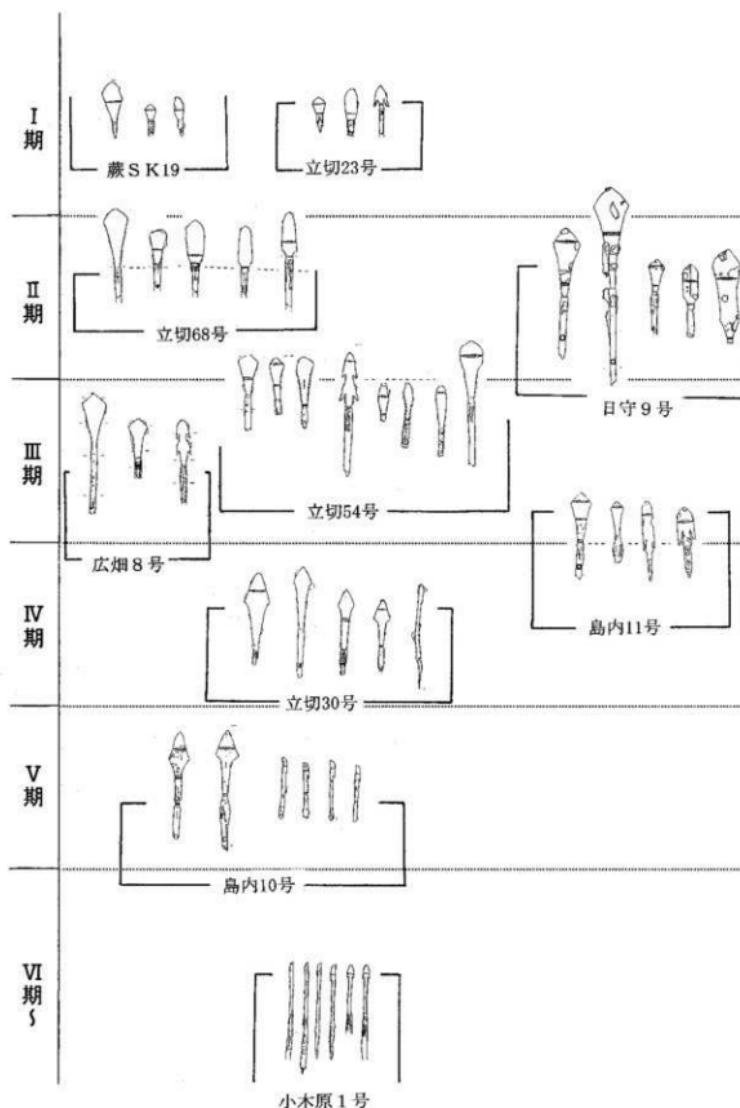
II期・・・5世紀前葉。おおむねTK73併行期まで。

III期・・・5世紀中葉。おおむねTK73からTK216併行期。

IV期・・・5世紀中葉。おおむね TK216 から TK208 併行期。

V期・・・5世紀後葉。おおむね TK23 併行期。

VI期・・・5世紀末葉以降。おおむね TK47 併行期以降。



第11図 鉄鎌編年図（和田 2001 より）

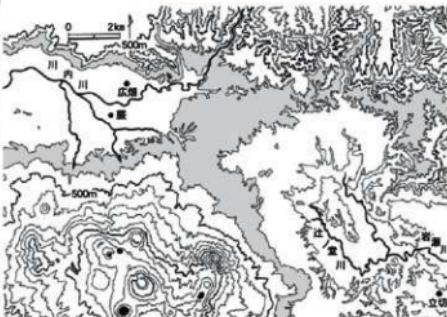
桶半札 1 号地下式横穴墓は、主頭鎌の形態および鉄鎌のセット関係からⅣ期にあたると考えられる。

3 地下式横穴墓の時期別分布

前述の編年観に従って、各時期ごとの地下式横穴墓の分布を概観する。概観するに当たって、時期は 5 世紀初頭（第 12 図）、5 世紀前葉（第 13 図）、5 世紀中葉（第 14 図）、5 世紀後葉（第 15 図）、5 世紀末葉（第 16 図）、6 世紀前半（第 17 図）、6 世紀後半（第 18 図）に分ける。

（1）5 世紀初頭（第 12 図）

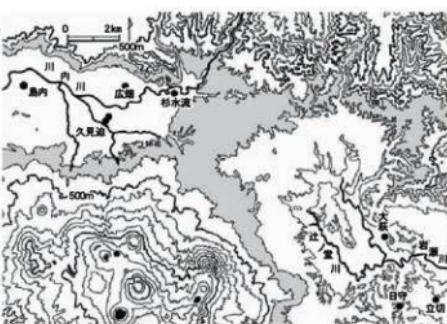
えびの盆地では蕨地下式横穴墓群、広畠地下式横穴墓群が展開する。岩瀬川流域では立切地下式横穴墓群のみが展開している。えびの盆地の二つの地下式横穴墓群が盆地中央部に展開するのに対し、立切地下式横穴墓群は、小林盆地中心部よりも都城盆地との境界に近い位置に展開する。



第 12 図 5 世紀初頭の地下式横穴墓分布

（2）5 世紀前葉（第 13 図）

えびの盆地周辺では蕨、広畠以外に盆地西部で島内、東部で杉水流、蕨と同じ台地上に久見追地下水式横穴墓横穴墓群が展開し始める。川内川の各支流域ごと盆地の東西の境に地下水式横穴墓群が展開している状態がわかる。



第 13 図 5 世紀前葉の地下式横穴墓分布

小林盆地周辺では、立切に加え、大蔵、日守の両地下式横穴墓群が展開を始める。大蔵については、宮崎平野部から大淀川、岩瀬川を遡上し小林盆地に至るまさにその入り口の部分であり、日守については、都城盆地と小林盆地の境界近くに展開する。

（3）5 世紀中葉（第 14 図）

えびの盆地周辺では前時期まで展開していた各群に加え、新たに灰塚地下式横穴墓群の形成が始まる。



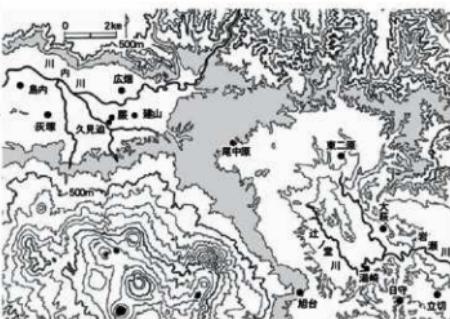
第 14 図 5 世紀中葉の地下式横穴墓分布

小林盆地周辺では、岩瀬川本流沿いに新田場、下ノ平、支流の辻ノ堂川流域に今回報告した楠牟礼地下式横穴墓群が造営される。また、霧島連山東麓には旭台地下式横穴墓群の形成が始まり、都城盆地から小林盆地へ至る東と南のルート上に地下式横穴墓群が展開するといえる。

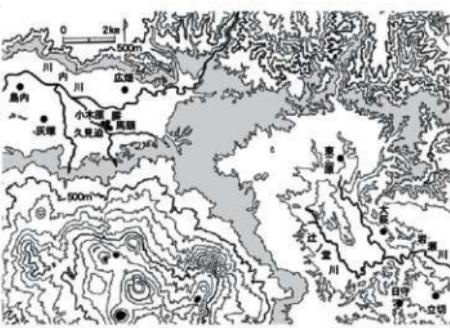
(4) 5世紀後葉（第15図）

えびの盆地では、建山が、小林盆地周辺では西端に尾中原、南東端に湯ノ先地下式横穴墓などが確認できる。それぞれ、調査範囲が限られているため、群構成の詳細がはつきりせずこの時期の前後にも築造されている可能性はある。

また、小林盆地の北側では、新田場地下式横穴墓群の造墓が確認できなくなり、同じ丘陵上に東二原地下式横穴墓群の造墓が始まる。



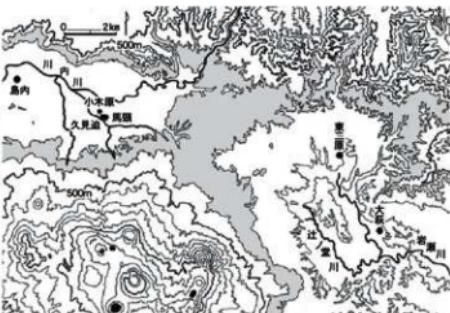
第15図 5世紀後葉の地下式横穴墓分布



第16図 5世紀末葉の地下式横穴墓分布

(5) 5世紀末葉（第16図）

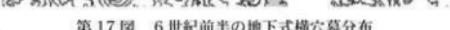
えびの盆地では小木原、馬頭の両地下式横穴墓群が蕭、久見迫に近接して展開を始める以外には目立った変化がみられない。小林盆地周辺では旭台地下式横穴墓群が造墓を停止し、辻ノ堂川沿いの地下式横穴墓も確認できなくなる。



第16図 5世紀末葉の地下式横穴墓分布

(6) 6世紀前半（第17図）

えびの盆地では広畠、灰塚の造墓が停止、小木原では蕭の一群が築造されなくなる。小林盆地では立切、日守が造墓を停止し大萩、東二原のみが継続している。



第17図 6世紀前半の地下式横穴墓分布

(7) 6世紀後半（第18図）

小林盆地周辺では地下式横穴墓の築造はほぼ確認できなくなる。えびの盆地についても、島内と小木原の一群以外の築造が停止される。

4 地下式横穴墓の展開とその背景

前述のように時期別の分布をおうことで、西諸県地域の地下式横穴墓には、時期によってその展開に特徴があることがわかる。それぞれの特徴ある時期を、大きく展開期、隆盛期、縮小期に分けることが可能だろう。それぞれの時期の分布から築造の背景を考えてみたい。



第18図 6世紀後半の地下式横穴墓分布

(1) 展開期（～5世紀前葉）

えびの盆地で発生した地下式横穴墓が、周辺地域に拡大していく時期である。小林盆地周辺ではいち早く立切地下式横穴墓群が造墓を開

始、続いて、日守、大萩と小林盆地の西境に展開する。まず、都城盆地との境界、次いで宮崎平野部への玄関口に造墓されており、日向内陸部と平野部をつなぐ交通ルートとして、小林盆地から都城盆地を経る陸上ルートがまず存在し、ついで岩瀬川、本庄川、大淀川を経る河川沿いのルートが整備された結果ととらえることが可能かもしれない。このような理解が許されるならば、国富町本庄地下式横穴墓群や宮崎市生目地下式横穴墓群が平野部ではかなり早い段階で展開されることも、日向内陸部から平野部へ至るそれぞれのルート上にあることで解釈できる。

えびの盆地では盆地東西に地下式横穴墓群の展開がみられる。東は大口盆地を経て川内・出水平野方面や錦江湾方面へ向かうルート、西は小林盆地の中継地点と理解することが可能であろう。

この時期、造墓域が次第に拡大する状況は、古墳時代における日向内陸部の政治的位置づけの重要度が増している事を現しているといつていいだろう。

(2) 隆盛期（5世紀中葉～末）

岩瀬川、川内川の主な本・支流沿いのほぼ全域に地下式横穴墓群が展開する。また灰塚、旭台などの地下式横穴墓群の形成も始まり人吉盆地からの南下ルートと、都城盆地から霧島山麓を北上するルートを押さえる形となっている。この時期、群の数も造墓数もピークを迎え、大部分の群が5世紀代を通じて継続していく。えびの盆地を含む西諸県地域の東西を埋むように地下式横穴墓群が展開し、この時期西諸県地域を大きく一つのまとまりとした政治圏が形成されたと解すことも可能かもしれない(6)。また、えびの盆地、小林盆地ともに蛇行剣や二段逆刺付鉄鏃が副葬されるものがみられるのに対し、甲冑を副葬するものは、えびの盆地の小木原と島内に限定されており、畿内中枢部との関係において、えびの盆地と小林盆地の勢力に明らかな格差があることが伺える(7)。

(3) 縮小期（6世紀前半～）

6世紀代にはいると急速に造墓数が減少し、えびの盆地では小木原（久見追、馬頭）と島内、小林盆地では大萩と東二原のみが造墓を継続する。6世紀の後半段階になると、えびの市島内と小木原（久見追・馬頭）以外では地下式横穴墓の造墓自体がみられなくなる。島内と小木原は隆盛期に甲冑の副葬を

行っており、これらの集団が畿内中枢部との強いつながりを背景にして、西諸県の勢力を集約していく過程が造墓の縮小という形で現れているのかもしれない。

5 まとめ～楠牟礼1号地下式横穴墓の位置づけ～

西諸県の地下式横穴墓群は大きく、えびの盆地周辺域と小林盆地周辺域に分かれる。前述のように時期別にこれらの分布をみると、まず日向内陸と周辺地域を結ぶ交通の要衝を押さえていることがわかる。次いで、岩瀬川、川内川の各流域沿いに地下式横穴墓群が数多く展開していき、これらの勢力を最終的には、えびの市島内と小木原の勢力が集約していくこととなる。

楠牟礼1号地下式横穴墓については、隆盛期に岩瀬川の支流、辻ノ堂川沿いに造られている。位置的には、都城盆地から小林盆地へ至る東と南からの両ルートが重なるあたりである。おそらくは、小林盆地の勢力が都城盆地との交通（交流・流通と言えてもいいかもしれない。）を掌握していくなかで、その要衝をおさえる役割を担った集団により造墓されたのであろう。

第3表 楠牟礼1号地下式横穴墓データ表

（全長・玄室規模の単位はm、面積はm²）

No.	全長	玄室				装飾	人骨	墳丘	閉塞	築造時期	出土遺物
		奥行	幅	高さ	面積						
1	2.87	1.83	1.78	0.94	2.94	無	3 (5)	—	—	5世紀中葉	剣・短剣・鉄鏃 刀子・鉢・資金具

註

- (1) 前述したように聞き取り調査の結果、以前、地下式横穴墓が陥没したらしいことが分かっている。（小林市教育委員会 1993）
- (2) えびの市島内などには、直交して重なる形で理葬されている遺体はある。（中野和浩 2001）
- (3) 流入土や崩落土により、移動、搅乱された可能性も付け加えておく。
- (4) 茂山謙（1980）は二段逆刺付鉄鏃の年代観から地式横穴墓が5世紀の早い段階に遡りうることを指摘している。まさに卓見であったといわざるを得ない。しかし残念ながら、地域の後進の研究者がそれをさらに深化し地下式横穴墓の編年研究に役立てようとする動きには発展しなかった。
- (5) 面高哲郎はか 1997 553 頁による。ここに挙がっている県内 8 例について再確認を行ったが、6世紀代の明確な根拠となる遺物をもつものは 1 例もなかった。南九州での他の 7 例についても同様である。
- (6) 今回は宮崎県側の検討に限っているが、このような結論を導き出すには鹿児島県側の大口盆地等を含めた検討が必要であろう。
- (7) 橋本は、中期後半のえびの地域に甲冑が集中して出土することについて「この時期、近畿中央部の政権側にとっての政治動向には軍事編成の広域化・朝鮮半島での軍事行動なども背景として新たな領域の政治的統合化を推進していた。（中略）南九州に限定される地域的様相ではなく、汎列島的な近畿中央部政権側の政治動向と密接に結びつくものである。」（橋本 2003 198 頁）と指摘している。

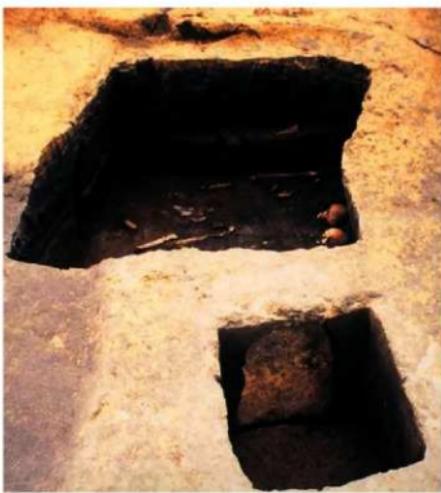
【参考・引用文献】

- 小林市教育委員会 1993『小林市遺跡詳細分布調査報告書』小林市埋蔵文化財調査報告書第7集
九州前方後円墳研究会 2001『九州の横穴墓と地下式横穴墓』第4回九州前方後円墳研究会大会第II分冊
面高哲郎・永友良典・北郷泰道 1997『武器・武具と馬具』『宮崎県史』通史編 原始・古代1
茂山謙 1980『二段逆刺を有する鉄鏃について一地下式横穴出土鉄鏃集成覚書(1)』『研究紀要』第5輯 宮崎県総合博物館
中野和浩 2001『島内地下式横穴墓群』えびの市埋蔵文化財調査報告書 第29集
橋本達也 2003『崩附鉄器からみる南九州の古墳時代』『前方後円墳建築造営縦横域における古墳時代社会の多様性』第6回九州前方後円墳研究会
東 憲章 2001『地下式横穴墓の成立と展開』『第4回九州前方後円墳研究大会 九州の横穴墓と地下式横穴墓』第II分冊
藤井大祐 2007『九州南部の中期古墳』『第10回九州前方後円墳研究会』宮崎大会 九州島における中期古墳の再検討
北郷泰道 1986『南境の民の墓制』『えとのす』31
北郷泰道 2006『再論・南境の民の墓制』『宮崎県立西都原考古博物館 研究紀要』第2号
村上久和 1992『48号横穴墓』『上ノ原横穴墓群II』一般国道10号線中津バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書(2)
和田理啓 2001『日向の地下式横穴』『九州の横穴墓と地下式横穴墓』第4回九州前方後円墳研究大会 第II分冊
和田理啓 2002『宮崎の鉄鏃ーその分布と流通についてー』『考古学ジャーナル』No.496

図 版



発見時の状況



完掘状況



左側壁部分

豊坑（東から）

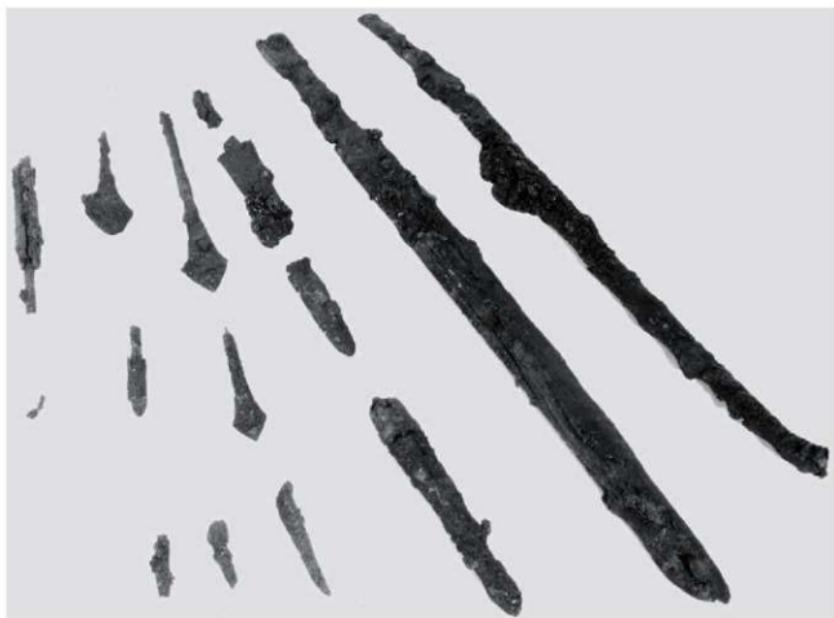
玄門（西から）



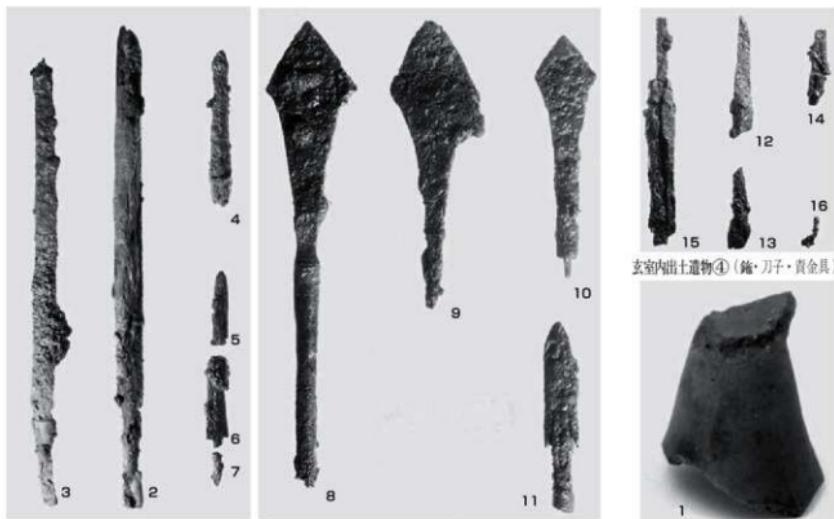
人骨等検出状況（南東から）



副葬品検出状況（北西から）



玄室内出土遺物①



玄室内出土遺物②（剣・短剣）

玄室内出土遺物③（鐵鐵）

竖坑出土遺物（高环）

報告書抄録

ふりがな	くすむれ 1 ごうちかしきよこあなぼ						
書名	楠牟礼 1 号地下式横穴墓						
副書名	平成 18 年度交通安全整備事業一種（国道）国道 221 号下堤工区歩道設置工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
シリーズ名	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書						
シリーズ番号	第 180 集						
編著者名	丹 俊詞・和田理啓						
発行機関	宮崎県埋蔵文化財センター						
所在地	〒 880-0212 宮崎市佐土原町下那珂 4019 番地 TEL 0985-36-1171						
発行年月日	2008 年 12 月 19 日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
楠牟礼 1 号地下式横穴墓	市町村	遺跡番号					
楠牟礼 1 号地下式横穴墓	宮崎県小林市大字堤字楠牟礼	45205 1975-14	31° 57' 4"	131° 0' 27"	20070518 ~ 20070528	6 m ²	平成 18 年度交通安全整備事業一種（国道）国道 221 号下堤工区歩道設置工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
楠牟礼 1 号地下式横穴墓	墳墓	古墳時代	地下式横穴墓	人骨・剣・短剣・鉄鎌・刀子・鑑・貴金属	地下式横穴墓の集中地帯の中で分布のみられない空白地点であったが、今回の発見でその空白を埋める新資料を提供できた。		

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第180集

楠牟礼1号地下式横穴墓

平成18年度交通安全整備事業一種（国道）

国道221号下堤工区歩道設置工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2008年12月

発行 宮崎県埋蔵文化財センター

〒880-0212 宮崎市佐土原町下那珂4019番地

TEL 0985(36)1171 FAX 0985(72)0660

印刷 有限会社 いろは企画

〒889-1603 宮崎郡清武町正手3丁目19-2

TEL 0985(85)5889 FAX 0985(85)5889
